
神魔聖杯アルトックス～高校生が神になりました～

白蜜印のメイド漬け

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神魔聖杯アルトウクス〜高校生が神になりました〜

【Nコード】

N3827T

【作者名】

白蜜印のメイド漬け

【あらすじ】

神と悪魔の壮大な戦いに訳も分からず巻き込まれた、ごく普通の高校生・天川勇人の厨二病的なお話です。

ブローグゝ刀といちこパンツゝ

女子高生が刀を振り回して追い掛けてきていた。

妄想ではなく、まして暑さで頭がやられたわけではない。

本当に、この俺——あまかわゆうと天川勇人の背後には、そんな突飛な姿をした女子高生がいるのだ。

バイト終わりの午後九時過ぎ。いつも通り、傾斜の厳しい帰り道を上がっていた時だ。

満月をバックに、その女子高生が待ち構えていたのだ。

いや、最初は待ち構えていたなんて認識すらしていない。ただそこにいるだけ。

だから、素通りするつもりで上がっていたのだ。

ところが、俺が坂の途中まで上がってきた頃、むこうから話をかけてきたのだ。

透き通った声で、こう。

「天川勇人、お前を殺す」

とても初対面の相手に話しかける言葉じゃないし、そもそも誰かにかけていい言葉じゃない。

で、その時、俺は気付いたのだ。

そいつの手で鈍く光る——刀の存在に。

あつ、やばい。俺の直感は正しかった。

そいつは本気で俺を襲いかかってきたのだ。

だから、俺は本能的に逃げた。

疲れなんて関係ない。とにかくそいつから少しでも遠くに逃げようと必死だったから。

だが、そんな詭弁は通じるわけがなく、俺は坂を下りてすぐのところで失速した。

それにあわせて、むこうとの距離も縮まっていく。

何とか距離を空けようと頑張るも、体力の差で呆気なく詰められ

る。

終わった。俺は死を覚悟した。呆気ない終わり方だとも思った。貯めてたバイト代はどうなるんだとも。

ほんの一瞬で、様々なことが思い浮かんだ。

「天川勇人、覚悟オオ！」

理由もわからずに殺されるのは癪だが、ただ普通に死ぬよりかマシか。

俺は立ち止まり、目を瞑った。

「えっ、ちよっ！」

先程の凜々しい声からは想像もできないくらいに、間抜けな声だった。

「急に止まっ……！」

声の直後、俺の隣を転がり落ちてくるものがあつた。

でかいおにぎりだ、と思つた。

「うう……」

いちご柄のパンツ丸出しで、そいつが転がってきたのだ。

何て恥ずかしい格好なんだ、とは思わなかった。

「誰か救急車呼んで」

こつという状況だから。

さて、ここで俺が取るべき、しかるべき対応とは。

とりあえずケータイを取り出す。

電話をかける。

つなげる。

「——あ、警察の方ですか？　ここに刃物を持った女が一人いるんですけど」

これでよし。

「非情者——！」

「お前が言つな！　……あ、こつちの話です。えーと場所は……」
十分後。

「えーと、ミナコ＝ロックベルね……」

随分と変わった名前してるな。

「見慣れない制服だけど、どこの学校通ってるの？」

「学校には属していない」

と、自らの格好を否定するような返答をしたのち、俺は耳を疑う発言を聞いた。

『所属は“神罰商会”だ』
いや、聞いてしまった。

ブローグゝ刀といちこパンツゝ（後書き）

目に秘めたる力を持つ——俗に言う邪気眼とか言うのも、厨二病と呼ぶみたいです。

どうも、作者の白蜜印のメイド漬けです。

この作品は、厨二病設定全開なお話です。

いえ、僕はただ自分の好きな設定を好きなだけぶち込んだただけなんですけどね。

どうも、それが厨二病というやつに引っ掛かるみたいです。全開かどうかはおいといて。

それはさておき。この作品は、神と悪魔の実権争いを面白おかしく描いたお話です。

しかし、そんな中に巻き込まれた天川勇人は嵐に投げ込まれたようなものです。

そんな天川勇人の奮闘ぶりに多少期待しつつ、ヒロインたちのキヤツキヤツムフフなシーンに全力で期待してください（笑）

ラウンド1 住所は異世界です

ミナコ「ロクベルという帯刀した女子高生は、とりあえず近く
の交番に連れていかれた。

参考人として、被害者の勇人も同行する羽目に。

ただでさえ疲れているのに、本当に迷惑な人だ、と心中で愚痴る
勇人であった。

二人を乗せたパトカーは、現場から十分ほど離れた交番まで向か
った。

この辺になると、現場のあの辺りとは違って、コンビニやスーパ
ーなどが見えてくる。

そんな中に挟まれて細々と佇む交番に、二人の姿はあった。

色々と事情を説明すること十五分。

「お騒がせしました」

二人が仲良く(?) 交番から出てきた。

見ると、ミナコが持っていたはずの刀が消えていた。身に隠せる
ような代物でもないし、没収されたか。

「はあ……………」

勇人は深く溜め息をついた。

偶然にもミナコも同じタイミングで溜め息をついていた。

「……………」

真似すんな、と言ってやる気力もなく、まして怒りをぶつける気
力もない勇人であった。

何も言わず、ミナコに背を向け、疲れた足取りで帰っていった。

*

てくてく。

「……………」

てくてく。

「……あのー」

坂の途中、勇人は立ち止まり、そして後ろを振り向いた。

「付いてくるのやめてくれませんか？」

そこには、ミナコがいた。

交番を出てからずっと、後ろを付いてきていたのだ。こつちに家があるわけでもなしに。

まさかまだ懲りずに俺の命を狙っているのか、とは思ったが、それならとつくに殺してるはずなので、じゃあなんだ？

「誤解されないよう注意しておくが、決して、この国の通貨を一切持っていないから泊まるに泊まれないわけでないからな。決して」
「……………」

どうやらそういうことらしい。肝心なところで転倒したりと、ミナコはバカな子なんだと勇人は思った。

「……ただでさえ見ず知らずの他人なのに、ましてつい数十分前に命を狙ってきた奴を泊めれるほど、俺の精神は狂ってない。——以上」

ズバリと言い付け、勇人は再び坂を上っていった。まったく、常識外れにも程がある。

苛立ちからズカズカと坂を踏んでいく勇人。

「ああ、痛い！ 何でこんなに痛いんだろう！ ああ、そうか！

さつき誰かさんが急に止まって刀で傷つけられたからだ！ —— ああ、困った困った！ 本当に困った！」

背中から、やけに演技がかったミナコの声が届いた。

「そうか。じゃあ、金輪際、刀なんて持たないことだな」

「うつ……………」

あからさまに気まずい声を出したのち、ミナコは全力疾走で坂を駆け上がり、あるうことが勇人の目の前で土下座をした。

「私を泊めてくださいー！！」

これが問題持ちじゃなければどんなに嬉しいことか。

ミナコの土下座に、さすがに勇人も見方が変わった。

「家はどこにあるんだよ」

「異世界」

「……帰る」

「本当なんですって！」

必死に足にしがみつくミナコ。それを振り払おうとする勇人だった。

「あのな、住所が異世界って言われて、ハイそうですか、なんて言えるわけないだろ。そもそも何だよ、異世界って」

「異世界は異世界です。それ以上言いようがありません」

「納得のいく理由を述べよ。じゃないとこの話は無しだ」

「話しても、納得なんてしてもらえないと思いますけどね」

それは確かに……、とそこだけ納得する勇人。

まあ、異世界と言うからには、この世界とは異なる別の世界ってことになるのだろうが。

だからと言って、それを分かりましたとは言えないわけで。

「……まあいい。中で話を聞いて、泊めるかどうかはそれからだ」

「本当ですか!？」

「その代わり」

と、勇人は強調して言うのと、手のひらを前に出した。

「さっきのアレを出せ」

「アレって……ああ、十六夜こよひのことですか？」

ミナコの首もとで光る黒い十字架。十六夜と呼ぶそれ。原理は不明だが、携帯に便利な縮小サイズになれるらしい。

それを間近で目撃した勇人は、それが“先程の刀”だと知っている。

「そう、それ。そんなもん持ったまま家に上げるわけにはいかないからな」

ミナコは少し悩み、仕方ないし渋々と十六夜を勇人に渡した。

「他に武器はないんだろうな？」

「ありませんけど、一応、確認してみますか？」

挑発的な口ぶりで、ミナコのスカートの裾を少し、捲つてやった。舐めるようなその眼差しが、勇人に突き刺さ——らない。

「ないならいいよ。いちごパンツ」

「！！」

がつつり見られていることをミナコは知らない。

危うく痴女になりかけたミナコであった。

「ちよつ、置いてかないでください！」

なんでこんなことに……、と、自分がしたことだが、勇人は思わずにいらなかった。

ラウンド2 日本生まれの日本育ちの神殺し

山道の入口付近にひっそりと佇む小さな家。

物置小屋にしか見えない小さくて狭苦しいその家を見たミナコは、思わず口走ってしまった。

「ゴミ箱ですか？」

「そうか。そんなに野宿がしたいか。そうかそうか」

妙に納得する勇人はミナコを置いて、さっさと家に上がっていった。

ミナコにできることと言えば、

「ごめんなさい、勇人様〜！」

これくらいだ。

*

外見に比べて、中はなかなかの奥行きがあった。

もともと、横にはなく上にだが。

とりあえず居間に座られた勇人。さて、本題に入るわけだが、

「おい、何で増えてる」

そこにはメイドが増えていた。もちろんオーソドックスな白のメイド服を着用済み。灰色の短髪で、蒼白色の目は諸々の情報と相俟って、どこか無感情なイメージを感じさせる。

実は勇人。家に上がってすぐに貴重品を隠していたのだ。念のためである。

どうやらその間に増えたというか上がってきたみたいだが。

しかし、女子高生にメイドとは。殺風景なこの畳部屋には似合わない過ぎる組み合わせだ。

「侍女のエフです」

と言って、ミナコはこちらですとエフに手を向けた。

「いや、自己紹介はいい。何で増えてるんだと訊いてるんだ」

「大勢の方が楽しいじゃないですか！」

「帰る？ いや、むしろ帰れ」

「ごめんなさい」

——と、冗談はさておき。ミナコの表情が変わる。

ゾクツと背筋に走る寒気。あの時、ミナコと初めて対面した時と同じ寒気を勇人は感じていた。自然と体に力が入る。

「私達、神罰商会は、とある事情から『神殺し』であるあなたを――

――天川勇人を殺すことを命じられており、この世界に来ました」

私達、というからには、やはりエフも神罰商会の一員なのだろう。それはさておき。

「神殺しねえ……。期待に応えられないようにで悪いが、俺はそんなんじゃないし、そもそも命を狙われる理由もない」

「しかし、アルトウクス神話では、天川勇人。あなたが神殺しとされていきます」

「……仮にその何とか神話通り、俺がその神殺しだとしてだ。何で殺されることになるんだ？」

「――神魔聖杯に多大な影響を与えてしまうからです」

「神魔聖杯？」

「今は私達の世界で行われている実権争いと思ってください」

本当に何も喋らないなあ、とエフを見て勇人は思った。

そんな勇人を露知らず、ミナコは話を進めた。

「神魔聖杯は二つのアイテム――神器と魔器と言つのですが、これら二つのアイテムをより多く集めた方が勝利に近づきます」

「要するにアイテムの奪い合いをしてるってことか」

「そうです」

「神殺しつてのは、その奪い合いにとって邪魔な存在。だから殺しておく。そういうことか」

「物分かりがいいですね。素晴らしい順応性です」

「頭ごなしに否定するのは嫌いなんでな。――ところで、あんたら

飯はまだなんだろう？」

「ええ、まあ」

「簡単なものでいいなら、作ってやるよ」

ラウンド3 激しく変態

ありあわせの食材が奇跡の変貌を遂げた。

食卓で眩い輝きを放つ食材達。高級レストランにも比に劣らないその姿に、ミナコはただただ感動していた。

「どうした。お腹減ってるんだろ？」

感動のあまり涙を流すミナコ。

「勇人さんは神殺しじゃありません。神です！」

とか言いながら、かなりのスピードで食事につづいていた。

まあ、こんなに元気よく食べてもらえるのは悪くない。

（異世界人も同じ腹の減る生き物だってことだな）

今日の天川家の食卓は少し騒がしい。

*

「いやー、すいません」

と、陽気に言うミナコとその隣にいるエフの頭からは湯気が立っていた。

やや大きめな紺のジャージ姿で、胸元には天川勇人と刺繍されている。

「食事だけでなくお風呂まで頂いてしまつて」

勇人は二人が入浴中に食器洗いを済まし、今は布巾で食卓を拭いている。

「もう色々と諦めてるからな。というより、暑くないのか？ 長袖なんて着て」

「そんなこと言っても、私達は脱ぎませんよ」

「いや、親切心で言つたつもりなんだが……」
話を切り換え。

「——ところで、あんたらは下でいいか？」

「野宿でなければ何でもオーケーです」

トイレを薦めてみようという気持ちが一瞬芽生えたが、空気を悪くするだけなのでやめておいた。

「じゃあ、この机どかして布団敷くか。上から布団持ってくるからテレビでも見ててくれ」

そう言い残し、勇人はミナコにリモコンを渡して、二階に上がっていった。

「分かりましたー」

リモコンを渡されたミナコが使い方が分からず、机上に置いてしまった。

ぼーっとしながら、辺りを見渡す。

で、ふと思った。

「そういえば、一人で暮らしてるのに布団の予備があるんですね」

コクン、とエフ。

「勇人さん一人に任せるのは申し訳ないので、とりあえず布団を運ぶを手伝いましょう」

コクン、とエフ。

二人は二階に向かった。何故か忍び足で。

*

「早く上がってください、エフ」

エフは恐ろしいくらいマイペースに階段を上がっていた。

後ろでつつかかっているミナコの顔面には、もろにエフの尻が当たっている。

時間かけて何とか上がったミナコとエフの二人。一度も勇人として変わらなかったのが少し気になる。

二階には部屋が二つあった。その一方が開いている。勇人の部屋だ。

「勇人さん、手伝いにきましたよー」

ちやうど言い切ると同時に部屋の前に立つた時だ。

バン！ と勢いよくタンスの段を閉める勇人と出くわしたのは、そのタンスは明らかに布団が入るような大きさではない。

キラリ、とミナコアイズが光る。

「勇人さん、何を隠したんですか？」

「さて、布団を運ぶか」

「とぼけても無駄です！」

ミナコの第六感が告げる、

「そこにアイテムがあるのはお見通しです！」

やはり天川勇人は神殺しだったのだと。

「ばっ、そこを開けるな！」

持っていた二人分の布団を下ろす勇人。

タンスを開けようとするミナコ。

どちらが早いかは明白だった。

ガサッ！

「見つけたです、究極のアイテム……！！」

と、勢いづいたミナコだったが、途端、思考が全停止した。

もはや弁解の余地を無くした勇人は、タンスの角に頭をぶつけて死のうとしている。

「パ、パンツ……？」

そこには、女性物の下着があつた。

幼女のパンツが敷き詰められていた……！！

ラウンド4 お兄ちゃんと魔界商会

寝れない。いや、むしろ寝てはいけなさとさえミナコは思っている。

勇人の部屋。その広さはおよそ四畳半。非常に狭い。

そこに三人集まるとなると、それは詰め寄って座るのが、ある種の当然と言えるが……

「これは、ミナコと勇人さんの心の距離です」

二人の間には二畳分の隙間があった。

話も無駄だと思うが、勇人は身の潔白を証明することにした。

「言っておくが、あれは俺の物ではない」

「当たり前です！」

「あれは、妹の物だ」

青ざめるミナコ。鬼畜が現れたとさえ思える。

ここで勇人は大事な一言を言い忘れていた。あげる物というとても大事な一言を。

それに気付いたのは、エフがナイフ的な物をマジシャンみたく手に忍ばせているのに気付いた時だった。

「訂正する。あれは、妹にあげる物だ」

「……妹さんなんていないじゃないですか」

「妹は親と住んでいる。だからここにはいない」

犯罪の臭いはなさそうだとミナコは踏んだ。

エフは相変わらず手中に刃物を忍ばせている。

「信じてもらえるかわからないが……」

ある日、天川勇人は妹にプレゼントをあげることにした。

というのも、最近、妹がやけに冷たく接してくるからだ。もはや接してるとは言えないくらいに。

そこで勇人は、何かプレゼントをして妹と関係性を取り戻そうと思ったのだった。

とは言っても、女性の喜ぶものなどわからない勇人は、なかなか作戦に踏み込めなかった。

関係が徐々に悪化していく。そんな時である。

下着をあげると女性は喜ぶ、という恋愛向けのテレビの放送を見て、『これだ!』と思ったのだとか。

で、いざプレゼントを買いにランジェリーショップに出向いたわけだが(この時の周囲の冷たい視線を彼は知らない)、ここでまた一つ疑問が浮かんだのだ。

一つでいいのだろうか、と。

こんな布切れ一枚渡して、妹は喜ぶだろうか。

ふとした疑問だが、女性物の下着は何気に高く、残念ながら多くは買えない。

やはり一枚で妥協すべきか。諦めかけたその時だ。

非常に安いパンツを見つけたのは。

白という穢れなき色にも惚れ込んだ勇人は、パンツを大量に買い込んだ!

「……で、それを渡したんですか?」

「渡したんだが返されてしまっただな。——ちょうどあの時だったな、家族と別居するようになったのは」

「……………」

「数が足りないんだろうか。一応、今は千枚まで溜め込んで送ろうと考えている」

「足りないのは、勇人さんの一般常識と平常心ですよ」

(そうか。この人はバカなんだ! 凄くバカなんだ!!)

「……とりあえず、家族に絶縁されたくなければ、これ以上の嫌がら……サプライズは自粛したほうがいいかと、ミナコは思います」

「そうか。貴重な女性の意見だ。受け取っておこう」

ところで、と勇人。

「エフさんはいつになったら刃物をしまってくれるんだ?」

エフは勇人に初めて言葉を発した。

「――
“魔界商会”が来てます」

ラウンド5、バスト100センチと吸血魔女

月の綺麗な夜だった。

月の綺麗な夜を、より引き立てる美貌を持つ女が――

空にいた。

黒翼。

胸元がぱっくり開いた黒いドレス。

淫靡な雰囲気を漂わす、魅惑のボディーライン。

紅い長髪からは黒い角が飛び出していた。

人間ではない、何か。

それを決定付ける、鋭利な八重歯。

右の人差し指を一噛み。スーッと浮き出る血の滴を無造作に放った。

地上へ、ゆっくりと沈んでいく。

家屋。巨大な電話ボックスのような家屋に当たる。否。当てた。

何故か。そこに敵がいるから。

何故か。そこに神罰商会がいるから。

何故か。そいつらをまとめて爆死させたいから。

「うれしい夜にしましょ」

瞬間、急激な爆発と共に家屋の屋根が吹き飛んだ。

*

まったく事態が掴めない。勇人は一つ一つ状況を整理してみるところにした。

まず、俺は家の中にいた。

そこで、ミナコとエフの二人と話をしていた。

そしたら、エフが敵がいるとか言ってきた。
で、急に爆発が起きた。

家の中にいたはずなのに、おかしい。

「夜空が見える」

星という名の涙が勇人の頬をつたる。

「何を洒落たこと言ってるんですか！ 勇人さん！」

「洒落じゃない。洒落で屋根が吹き飛ばされたら困るんだよ、こっちは」

三人の頭上——半壊した家屋に腰を下ろす美女がいた。

「見上げれば、満天の星空。そして、美女」

「その声はやっぱり……！」

ミナコはそいつを知っている。

「——お洒落だと思わない？ 神殺しのお兄さん」

異質の雰囲気。ミナコと出会った時とはまた違った雰囲気を感じた。

「あんたらの知り合いか？」

「あいつは魔界商会の一人、ナイトメアリリー。吸血魔女です」

「吸血魔女？ 吸血鬼なら聞いたことはあるが……」

「吸血魔女は吸った血を媒介に魔法を使います。ある意味、吸血鬼よりタチの悪い生き物ですね」

「言ってくれるじゃない、バスト73センチ」

「わっ——！！ それをここで言うか！？」

「あ、違った。72センチだった」

「黙れ！ あんたが異常なだけよ！ バスト97センチ！」

「ごめんなさいね。この前、大台の100を超えたの」
につこり笑顔のリリー。

敗北感に崩れ落ちるミナコ。

本当に敵同士なのかと疑う勇人であった。

「——さて、本題に入りましょうか」

リリーは勇人を見た。

「天川勇人。私は、いえ、私達は神殺しであるあなたの力を必要としています」

「双方にとって邪魔って聞いたが？」

「それは、彼女が神殺しの本質を理解していないからです。……悪いようにはしません。——私達の仲間になってください」

ラウンド6 前戯終了で本番突入

仲間になってくださいとの呼びかけに、勇人はこう答えた。

「家、直してくれるのか？」

星空を眺めるようなロマンチックな趣味などない勇人にとって、仲間になるかどうかより、まずはこの壊れた家を直してもらうのが先だった。

あまりに間抜けな、いや、予想外と言っておこう。

あまりに予想外な返答に、リリーは家から落ちかけた。

プランが崩されたリリーだったが、何とか持ち直す。

「私達が神魔聖杯に勝利した暁には、もっと快適な空間を用意しましょう」

「それは一向に構わないが、それ、あんたがやるのか？」

「と、言いますと？」

「俺はあんたが直してくれるかどうかを聞いてるんだ。だって、これをやったのはあんただろ？」

おお、と感心するミナコ。

（この人、ただのシスコンじゃない……！）

ブロック崩しのように次々と壊されていくプランに、さすがに苛立ちを見せ始めたリリーだったが、

（……焦ってはいけない。小物と取引をするのとは訳が違う。冷静に。冷静に）

小さく深呼吸を一つ。

「……わかりました。時間を頂けるのでしたら、私一人でこちらの修理をしましょう」

「そうか。それならいい」

「ええ！？ そこは行かないと断るべきですよ！ 勇人さん！ その時だった。」

「！」

血の刃が飛来する。数は八。対象はミナコ。

（十六夜で――）

払い落とす、と、決め込んだ矢先、思い出す。

十六夜は今、勇人が預かっている、と。

「勇人さん！ 十六夜を貸してください！」

ミナコはバックステップで血の刃を躲す。内一本が判断の遅れにより足に突き刺さる。

負傷はない。運良く爪先の空いた部分に刺さった。

「勇人さん！ 急いで！」

「これは好都合！ ——天川さん、彼女は私達の敵なのですから、十六夜は渡す必要などないですよ」

「いや、そもそも俺は持つていない」

何を言ってるんですかとミナコ。

「危ないからって預かったじゃないですか！？」

「そうだが、危ないからタンスにしまったんだ」

通帳と一緒に、とは言わなかった。

「だから、今ごろ……」

そこはもう瓦礫の山。このどこかに埋もれているわけだが、あんな小さいものを探し出すのは困難。その間に殺される。

「やはりあなたは神殺しだ、勇人さん！」

「おお、うまい」

「感心しないでください！」

「残念でしたわね、ミナコ」ロックペル

疼く。

性的興奮にも似た快感。

全身に走る電流ような——殺意。

その右の眼を侵すは、紅。

アイテム『ブラッドアイズ』なり。

「まあ、せいぜい、——ゾクゾクさせてくださいね」

ラウンド7 瑠璃のアレ

慌てふためくミナコ。彼女の横ですることもなく突っ立ってた勇人。彼の足元にそれは降ってきた。

「ん、雨？」

ではなかった。赤い。というか――

「おいおいおい！」

激しく照りつける光。ヤバい。そう直感した勇人はとにかく脇に飛び込んだ。

コンマ数秒後、勇人の後方で爆発が起こった。

壁に転がるようにぶつかる勇人。巻き添えになったミナコも運良く爆発から逃れる。

「仲間の俺まで巻き込むなー！！」

との訴えをする勇人の頬に鉄拳が叩き込まれる。いいストレートだ。

「つぶ！ 今度は何だ！？」

もう訳のわからない勇人。

そんな彼の目の前で、胸を押さえて顔を赤らめるミナコがいた。少し涙目である。

「何だじゃありません！ どさくさに紛れてどこを触ってるんですか！？」

どうやらそういうことらしい。

「いや！ わざとじゃないんだ！ 転んだ拍子に――」

「勇人さんはシスコンなんですから、私は対象外です！」

「そもそも俺はシスコンじゃねえ！」

ごたごた揉めていると、またしても血が降ってきた。

ちょうど二人の真ん中に降ってきて。

それに気付いた二人は顔を見合い、絶妙なタイミングで真横に飛び込んだ。

僅差で爆発。炎上するその惨状を見て、二人ともますます腹が立つてきた。

「危ないだろ！」

「危ないじゃないですか！」

が、そもその原因に気付く。

二人は空を見た。正確には、リリーを見た。

「危ないだろ！」

「危ないじゃないですか！」

そこに割り込んできたのが、エフであった。

人間離れた跳躍により、リリーとの距離を一気に詰め寄る。

その右手にはフォークが握られていた。サイズは大きめ。包丁くらしいの大きさはある。

左手にはナイフ。フォーク同様、こちらも大きい。

近接戦に持ち込んだエフ。確かにこの距離での爆発の使用は不可能。

だが、リリーは何も爆発を売りにしているわけではない。

そちらが近接戦で挑むなら、こちらも近接戦で――

リリーは魔器『ブラッドアイズ』による血液増幅により、たった一滴の血から、それとは比較にならない大きさの刃を生み出した。

エフの急所狙いの攻撃、猛攻を血の刀で切り崩す。

「いいですね！ その目！ 殺戮人形キリングマシーンの異名に偽りを感じない！」

激しい空中戦の模様を、地上で眺める勇人とミナコ。

「……あれ、ここって日本だよな？」

「ここは日本ですが、空は異世界ですよ」

「うまいこといったつもりか。それより仲間なんだから、加勢してやったらどうなんだ？ 魔法とか使えるんだろ？」

ギロツと勇人を睨みつけるミナコ。

「勇人さんが十六夜を持つてるから戦えないんじゃないですか！」

「……ああ、そうでしたね。そうでした」

物凄い目力から逃れるように目を逸らした勇人。

事件はそこで起きていた。

「！！ 下着が！」

タンスが炎上していた。

パンツが炎上していた！

「瑠璃（妹の名前）の下着がああああ！！」

パンチュが炎上していた……！！

ラウンド8 パンツ炎上で神降臨

勇人は叫んだ。

届かぬと分かっている、自分の目の前で燃え上がる純白の思い出達の姿を見ながら。

我が子のように愛いれたパンツが燃え尽きていく。

意識の向こう側から、あの日の、妹瑠璃との仲良かった日々が蘇る。

しかし、パンツが姿を消していくにつれて、その声は遠く……、そして、消えた……。

パンツと共に。

途端、勇人は膝から崩れ落ちた。

世界の終わりを迎えてしまったような底知れぬ絶望感に打ちのめされる。

傍らで見守る、というか若干引いてるミナコは、慰めるべきかの重大な決断に迫られていた。

例えばこれが、亡き家族の遺品とか形見が燃えたのだったら同情するのだが……

(パンツで……)

無理だ。神に祈られても無理だ。だってパンツだもん。

「……フッフ」

突如、その不気味な声は届く。

ミナコは勇人を見た。いよいよ壊れたかと思いながら。

「ゆ、勇人さん？ 大丈夫ですか？ (主に頭が)」

勇人はその不気味な低いトーンのまま、言葉を発した。

「誰に物を言っている。俺は神だぞ？」

いかん、完全に壊れた。

ミナコは祈った。手を合わせ握り締め、神に誓った。

「おお、神よ。この哀れな子羊をお救いくださいませ」

「哀れな子羊とは、貴様のことか？」

勇人は立ち上がるや否や、邪魔だとばかりにシャツのボタンを破り捨てるように外した。ボタンはほつれたり飛んでしまったりと散々だ。

内なる獣を押さえつけるように片目に押さえ、またも笑う。全てを制圧するような声で。

季節外れの変態がそこに現れた。

「……す、すいません、勇人さん。ミナコ、少し調子に乗りすぎました」

ミナコを無視し、勇人は空を見た。

「あなたも加勢なさい。天川さん」

エフと激しくやり合うリリーから告げられたが、

「誰に物を言っている」

勇人は軽々しくあしらった。

言葉にリリーは耳を疑う。

「誰につて……あなたは私達の仲間なんですよ？」

「神であるこの俺が、下級悪魔の貴様と仲間だと？ 笑わせるな」

リリーは攻撃を中止した。

隙だらけに思えた瞬間だったが、エフもまた攻撃を中止した。

殺戮人形の異名を持つ彼女が感じた、圧倒的な殺意。

それを——リリーから感じた。

「……今、なんて？」

右腕を、振るう。

「——もう一度、言ってくださいる？」

一滴……いや、違う。

血の雨が降ってきた。

そして、その全てが激しく照りつけ――

「！ 勇人さん！ 危ない……！」

「――“視えた”」

ふと、勇人は呟く。

おもむろに右の親指を噛んだ。

「！ それは……」

そして、リリーのように、いや、リリーと同じく血を振り撒いた。
激しく照りつける血に向けて、その何倍何十倍の量の血をぶつけてやった。

激しく、照りつける。

「ブラッドアイズ……！！」

ラウンド9、異世界に行きましょ、そうしましょ

高圧的な高笑いの下、勇人の爆発がリリーのを上回る。

「つぐ……!!」

爆発に飲まれたリリー。高い熱から脱するようにそこから抜け出すと、

「！」

そこには勇人がいた。その手には十六夜が握られていた。

ただの十六夜——日本刀ではない。形が変わっているのだ。まさにそれは西洋の剣。しかも、通常より二回りほど大きい、大剣である。

元の持ち主、ミナコはそれを見て驚愕している。

十六夜が見つかったから？——違う。

十六夜が自動で手元に返ってきたから？——違う。

十六夜が開放状態になっているから？——違う。

正解はこうだ。

「最大開放の十六夜……」

十ある開放状態の最高ランク、第十開放の十六夜を発動しているのだ。

神器『十六夜』は、持ち主の魔力に比例した変化を起こす、生き物のような神器である。

第十開放——つまり、最大開放まで引き起こした勇人には現在、それ相応の魔力があるということだ。

では、一体、何が相応に当たるのか。

ずばり、それは一つしかない。

——『神』である。

または、それと対となる存在の『悪魔』か。

いずれにせよ、この異なる系統の最強の力を秘めているということだ。

勇人は言っていた。俺は神だ、と。

冗談だと思っていたが――

「ホンモノ……」

のようだ。

第十開放の十六夜。その能力は『即死』。斬ったものを有無を言わずに必殺する。

「……！！」

殺される――リリーは恐れ、確信した。

目を瞑り、覚悟を決したその時だ。

「！？ これは……」

天空より、夜空とは正反対の明るい光が降りていた。

光は地上、空中を含めた四人を取り囲んでいる。

「天地ゲート……！！」

光は四人から重力を奪い、通常では有り得ない方向へ運んでいった。

空である。

「た、助かった……」

ホッと胸をなで下ろすリリー。

「くくく、命拾いしたな」

「いいんですか！ 勇人さん！」

ミナコが空間を泳いで上がってきた。

「俺は勇人ではない。神――」

ミナコは告げる。

これ、異世界に行きますよ？

ラウンド10〱魔界強制突入イベント〱

異世界に行きますよ？

そう言われた時には、地上は遥か手の届かぬ場所にあつたわけで。

「いつのまに!？」

その言葉が『効いた』のか、勇人の性格は正常に戻っていた。

地上に帰ろうと蛙みたくもがく勇人だが、天地ゲートの力には逆らえない。

四人を包み込んだ光は、紫電迸る巨大魔法陣への吸い寄せられていった。

「瑠璃ーっ!!」

その叫び声は、光と共に消え去った。

*

一瞬の出来事だった。

巨大魔法陣を潜つてすぐ、そこは異世界と呼ばれる場所に変わっていた。

淡い緑を薄く引いた空。

あちらこちらに頭が突出した崖が見られ、その全てに雲がかかっていて。

そう、雲である。

「う、嘘だろ……?」

四人を包み隠す巨大な黒い影。

ゴオオオ、というジェット機のような音につられて上を向くと、そこにはいかついウロコの肌が見えた。

そして、深紅のフォルムを飾る巨大な両翼。

トカゲにも似た、しかしその恐さは比較にならず。

「ド、ドラゴン!？」

四人を上空をドラゴンが飛行していた。

そこは、空中。

四人は空にいた。

落下することなく、雲を突き抜けて通る光が四人を地上へと案内した。

異世界の地上へと。

「コアドラゴンだよ。ドラゴンの赤ちゃんみたいなもの」

「あんなにデカいやつが!？」

もう一度確認する。やはり何度見てもデカい。ジェット機なんかより何倍も大きい。

「……というか、俺、本当に異世界に来ちまったのか？」

「むこうでは異世界だけど、ここでは——」

雲を突き抜ける。

壮観なり。

その先には、言葉にならないほどの壮大な景色が広がっていた。

『魔界。そう呼びます』

「魔界……」

木や草や花や。多少の姿形は違えど、日本でもよく見かける物、要素はある。

だが、決定的に違う要素が存在するのも確か。

先程のドラゴンにばかり、ファンタジーの世界でしか存在しない要素が多分に含まれている。

まさに、異世界、である。

「天地ゲートを使うなんて、マスターも太っ腹です」

「天地ゲート？ これのことか？」

「そうですよ。天地ゲートは、その名の通り、天と地を繋ぐ門です」
「……ちよつとまで。じゃあ、俺は宇宙にでも来たのか？」

「えーとですね。まあ、詳しくは後でマスターから説明があると思いますけど、この魔界というのは、むこうの世界とは全く別の空間に存在するので、日本はもちろん、宇宙という空間も存在しません」

「そ、そうか。イマイチよくわからんが……」

そうこう話していると、目の前にある建物が見えた。
立派なお城である。

「おお、城か。何か異世界……じゃなくて魔界に來たって感じだな」
「城じゃないですよ？」

と、ミナコは言う。

「いや、どうみても城……」

「あれはアークス聖十字学園と言いまして、——神罰商会の家です」

ラウンド１１～元魔界商会の校長～

六万坪の広大な敷地に建てられる巨大な城に模した校舎“アークス聖十字学園”。

施設を囲う緑の庭園には四季折々の花が咲き、景觀に彩りを添えている。

合計五つの建物からなる学内は、中心の教会を基に四つの建物と連結している。

これら全てを支えるのが、魔法陣の刻まれた円盤である。

魔法の効力により、校舎全体には強力な結界が張られており。

そして、何を隠そう。

この円盤がこそが、この広大な敷地を浮遊させているのだ。

アークス聖十字学園は、空飛ぶ学園都市である。

*

「凄いな。店もあるのか」

光に運ばれたまま、四人は空から学外を眺めている。

「この敷地内での生活が原則決まっているので、その辺の設備は充実してるんですよ」

学外は普通に車などが走っており、別のエリアを見ると、半獣半人の者達も住んでいた。

エリア一つ違うだけで、生活の仕方がかなり変わってくるようだ。
「……………」

ふと、後ろを向く勇人。先程からリリーの声が聞かれないので気になっていようだ。

学外の説明をする傍ら、そんな勇人に気付いたミナコが理由を説明してあげた。

「ルールですよ」

「ルール？」

「この天地ゲートには、マスターが作ったルールが仕掛けられています。——リリーはそれによって喋れないんですよ」

「ずっとか？」

「いえ、天地ゲートから解放されれば喋れますよ。まっ、逆に言えば、解放されるまでは喋れないわけなんですが」

どの基準で喋れない人物が決まるのかは定かではないが、単純に考えれば、敵対関係にある人物、になるのだろう。

「……………」

意識が飛んでる部分があるが、本人の覚えている限りでは、勇人はリリー属する魔界商会の仲間になったはずだ。

それなのに喋れているのは、単に基準を読み間違えているだけなのか。あるいは——

（……神罰商会の仲間になられたのか）

いずれにせよ、自分に不利な状況に転んでいるのは間違いないと思っ
ていいだろう。

「着きましたよ」

天地ゲートは学園の中心部、教会の頭頂部で止まっていた。

「校長室です。あそこにはマスターがいますので、くれぐれも無礼のないようにお願いしますね」

にっこり笑顔から一変。

「マスターは元魔界商会の人間。“余計な手間”を増やせば、容赦なく殺されますよ」

ラウンド12 神殺しの本質

酒臭い。煙草臭い。

姿形こそ聖職者のそれだが、その男の放つオーラは、完全に反宗教的だった。

黒い髪に黒いサングラス。

真っ白な正装に身に包む、マスターと呼ばれる大男。体長からかなりの威圧感を感じる。

そんな大男の前に立たされる、勇人、ミナコ、エフ、リリーの四人。

「……お前は誰だ？」

マスターはくわえ煙草のまま訊く。おかげで若干言葉が聞きにくい。空気が抜けてるイメージ。

「えっ、あ、俺ですか？」

自己紹介をしようとした勇人だが、

「ああ、わかった。もういい」

何なんだ、この人は。

「俺の名はアダム。天川勇人とか言ったな」

逆らわないほうが身の為なのだろう。勇人はミナコの忠告を噛み締めるように思い出した。

「お前はこれより俺の傘下に入ってもらう。三秒までなら文句を受け付ける」

「俺は——」

「123——ッ終了！」

「……受け付ける気ないですね」

勇人を無視してアダムは話を続けた。

「……そんじゃあ、まあ、そろそろ神殺しの正体でも明かすか」

アダムはいやらしい目つきでリリーを見ている。リリーを目線を逸らした。

ルールは解けているはずなのに喋りもしない。

(……まあ、妥当だな)

気を入れ直して、話に入って。

「ミナコ」

「はい」

「お前は神殺しを“神を殺す存在”だと聞いてるな？」

「はい。というより、マスターから聞かされたのですが」

アダムは深く溜め息をついた。

「……お前、こいつがそんなタマに見えるか？」

ミナコ、エフの視線が一斉に勇人に突き刺さる。

同じように首を横に振る二人。神も仏もない。

「俺は神殺しを神を殺す存在だと言ったが、確かにその通りだ」

「どっちなんですか？」

「殺す神にも人それぞれってことだ」

よくわからない。

結局、ただこちらの反応を見て楽しんでいるだけなのではとさえ思えてくる。

しかし、アダムは一言も間違ったことを言っていない。

「天川の体には、相反する二人の神が存在する。一方を天神。もう一方を邪神。この二人の神が殺し合うように拮抗することから『神殺し』と呼ばれている」

神殺しは神を殺す存在。

ただし。

体の中の神を。

ラウンド13〜メイドの大群〜

勇人とミナコが校長室を出てきた。

扉の前で御辞儀を一つ。

「失礼しましたー」

そう言つて、二人は校長室を後にした。

*

真つ白な内装。それでいて汚れ一つ見られない。神聖な場所なんだと思ひ知らされる。

（さすが神罰商会……）

ちなみに校舎の中には、人のみしかいないようだ。外で見たような者にはすれ違わない。

「そつえば、リリーはどうなるんだ？」

「マスターが勇人さんとの契約を切らせたら、解放されると思ひますよ」

「俺、もう神罰商会に入つてるんだ……」

「文句を言わなかった勇人さんがいけないのです」

何を自信満々に詐欺を誇つているのか……と言おうとした勇人だったが。

「まっ、言つてたら死んでましたけどね」

さらりと死を告げられたので、言うのはやめておいた。

「そんなに強いのか？ マスターって」

恐いと強いは違う。

恐くても強くはない。

正直、あの風貌からでは、そこいらのごろつきと大して差はないように思える。

「強いなんてものじゃないですよ。神魔戦争の生き残りですからね」

「神魔戦争っていうのは？」

「神魔聖杯の前身みたいなものです。神魔戦争の生き残りは、マスタ―を含めて三人しかいないんですよ」

「三人？」

その言葉に違和感を感じた勇者。神魔聖杯の前身であるなら、一人になるまで戦うのがセオリーなんじゃないかと。

「決着がつかなかったんですよ。まっ、この三人なら当然ですけどね」

廊下ですれ違う人達が変わった。

「——中でも聖人……、どうかしましたか、勇者さん？」
人間なのだが。

「いや、これ……」

全員がメイド。

「——エフがいっぱいいるんだけど」

全員がエフだった。

列を組んで行進（恐らく本人は普通に歩いているだけなのだろうが）していた。

「アレは**バスタープリンセス**殲滅隊。エフの姉妹達ですよ」

ラウンド14〜さらばミナコ＝ロックベル？〜

白と黒のメイド服に身を包む殲滅隊。

外見は完全に皆同じ。髪型から胸の大きさから果ては手足の細さまで。

完全なる一致である。

「殲滅隊はアルファベットのAからZまでの全二十八体で構成されてまして、個々の呼び名はその子に割り当てられた記号によって決まるんです」

「なるほど……だからエフはFなのか」

「そういうことですね」

殲滅隊は校長室に順番に入っていた。列を乱さないところが何とも機械らしい。

「……ん？ エフってひょっとして機械なのか？」

「気づいてなかったんですか。殲滅隊は皆、アンドロイドですよ」

どつりで口数が少ないものだ、と思う勇人だった。どうやらアンドロイドは口数が少ない、というのが彼の持つイメージなようだ。

「頭の中で情報を共有してるので、エフがマスターの元に来るように情報を送信したんですね」

「凄い技術力だな。魔界の技術力は」

「いやいや、それほどでも」

何故かミナコが照れていた。ミナコが作ったわけではないのに。

「……ところで、俺達、今どこに行ってるんだ？」

と、勇人は何気なく訊いたつもりだったが。

「……？」

先程の照れとはまた別の、乙女の純情とも言つべき姿で照れるミナコがいた。そんなに訊いてはまずいものだったのか。

ずっと隣り合わせて歩いてミナコが、急に早歩きをだし、勇人から距離を置いた。

そこについてから、ミナコは遅れて質問に答えた。
「——ミナコの部屋です」

*

意外とシンプルな部屋だった。

ミナコの部屋にお呼ばれした勇人。まず見て思ったのが、それだった。

勇人のイメージでは、女性の部屋というのは、もっと明るい色……特にピンクなどが全面に押し出されてるようなイメージを持っていたのだが。

普通だった。

広さは十畳くらい。特に印象付けるものはないし、目立った色もしていない。

むしろ普通よりおとなしいくらい。落ち着いた部屋だ。家具も小限に留められているし。

「……感想は？」

あまりジロジロ見ないでください——というお約束の台詞さえ言い忘れてしまうミナコは相当テンパっていると窺える。

挙げ句に感想を求めてしまうとは、もはや狂気の沙汰としか言いようがない。いや、これは言い過ぎか。

「感想？ 特にないが」

特にない＝普通。

ありがとうございます。

「そうですかっ！」

ミナコはとても怒っている。もう何が何だかわからない勇人であった。

「で、俺はここに来て何をするんだ？」

「何かするつもりなんですか!？」

「いや、襲うとかじゃなく」

「……そういう単語が出てくるということは、少なからずそのような思いがあるとわけですね」

しかし、ミナコは腕を交差してバツを掲げる。

「諦めてください! ミナコは勇人の妹にはなれません!」

「ここ、座るぞ」

ミナコの暴走を無視して勇人は適当な場所に座ってしまった。その前にかつしりと座り込むミナコ。

「……これは由々しき事態です」

「何が？」

「男と女。互いに異なる性別を持った者同士が……」

「すまん。もっとわかりやすく教えてくれ」

「つまり……」

ミナコは改めて、簡潔にまとめて言った。

「——ミナコと勇人さんが同居するということです」

ラウンド15 問題ない。大ありだけど

女性皆無。一般人というよりは変人と呼べる勇人。

「そうか」

返事も呆気なかった。

ミナコは硬直している。当然だ。

同居と言えば、恋人同士がすること。もしくはそれに準ずるもの。結局は親しい関係者同士がすること。

それを、そうかって……

「ミナコが思ってた反応と違います！」

バシン！ とちゃぶ台を叩いて訴えるミナコ。

勇人は一瞬、肩をビクツと震わせた。

「思ってた反応って何だ？」

「ミナコと一緒に寝食を共に！？ みたいな反応ですよ！」

「なるほど。でも、元々、俺の家で一晩過ごす予定だったんだから変わらないんじゃないか？」

「……なるほど」

ミナコは――否。

「それもそうですね！」

ミナコも相当な馬鹿だった！！

「しかし、互いに年頃なわけですから、布団は離して敷きましょうね」

「俺は泊めてもらってる身だから、そっちの意見に賛成するぞ」

（……まあ、勇人さんに限ってそういうことはないでしょうが）
少し気分が楽になったミナコ。

「いやあ、しかし、良かったよ」

などと勇人は言ってきた。

「やっぱり！」

「いや、そうじゃなくて。俺、このまま殺されるのかなーって思っ

てたからさ」

「何故です？」

「えっ、だって、俺を殺すよう命令されてたんだろ？」

ミナコの思考が止まった。

少しして、動き出す。

事を順に追ってみた。

神殺しである勇人に抹殺命令を下したのは、マスター。

だから、ミナコは勇人を殺しに向かった。

紆余曲折を経て、勇人さんは神殺しは神殺しでも、ミナコが知る

……いや、知らされた神殺しではなかった。
情報を正してくれたのは――

――マスター。

「……あれ、マスターが殺してあれれ？」

何かがおかしい。

言動に統一性がない。

まるで――

「大丈夫か？」

別々の人間を相手にしているような。

「……問題ないですよ！ ミナコの第六感がそう告げてます！」

ラウンド16 高校生が神になりました

ガチャ。

二人が話していると、扉が開いた。

そこに立っていたのは、エフだった。その後ろを殲滅隊が通り過ぎていく。用件が済んだようだ。

エフは何も言わずに部屋に上がって、いつもそこに座っているのか。勇人の横に立ち、ずっと下を見ていた。

勇人の正面にはミナコがいる。この位置がエフのお気に入りなのだろう。勇人は一つ横に移った。空いたそこにエフが座る。

「何を話してたの？」

「神殺し・天川勇人の今後の在り方です」

「俺？」

「神殺し・天川勇人の正体を知らないよう、策を練っていました」

「確かに勇人さんの正体がバレたらマズいね」

「いえ、違います」

否定して、エフは言う。

「天川勇人が神殺しであることは知られて構わないのです。むしろ、知られた方が有利に事が進みます」

「どうということだ？」

「この魔界では、神殺しはアルトウス神話に忠実な情報で通っています」

「そうみたいだな」

「その誤った情報を利用し、神殺し・天川勇人を脅威的な存在に見せるのです」

要するにこうということだ。

「勇人さんのショボさがバレないようにするんだね」

「そういうことです。天川勇人本人の戦闘レベルは1にも満たないので」

「ゲームだったら最初の村で即死するね」
「本人を前に言いたい放題だな」
「勇人の指摘を無視して、エフは用件を手っ取り早く伝えた。
「なので、今から準備します」
「準備？」

*

三人はゲストルームなる場所に移動した。
パーティーの衣装などが並ぶその部屋。ゲストルームというのは
どうやらお客様用の試着室のようだ。
宝石箱のようなゴージャスな室内。至る所で輝きを撒き散らして
いる。

そんな中、中央の全身を写す鏡の前にいかにも怪しい風貌の者が
いた。

黒いフルフェイス型のヘルメットに、つま先まで行き届く黒くて
長いマント。怪盗のような恰好をした者だった。

その後ろには、ミナコとエフがいる。
もう言わずとも分かるだろう。

「お似合いですよ、勇人さん」
半笑いのミナコ。

「こ、これは一体……」

低い声。まさに天神モード時のあの制圧的な声だ。

「神殺し・天川勇人の正装です」
「バカな……」

「これからは一部を除いて、ずっとその恰好でいてもらいます」
「よかったですね、勇人さん」
半笑いのミナコ。

「笑ってるの丸見えだからな」
「……」

「これは決定事項です。今日からは神殺し・天川勇人改め、神・アルトウクスを名乗ってもらいます」

ラウンド17超！大・食・堂！――

アルトウクスへの視線が熱い。

厳密に言えば、勇者への。

詳しく言えば、悪い意味で。

ブラックマスター（ミナコ命名）勇者は、その名の通り、全身を黒で固めていた。

一度部屋を出てみれば、それは注目的になること受け合い。

そんな恥を忍んで、勇者はミナコと共に大食堂に向かった。

オレンジの照明に照らされたそこは、名前に偽りなしの広さだ。

ちようど日本の県立高校くらいの敷地か。

ちなみに大食堂は地下にある。全棟の仲間が一同に集まる場所なのだ。

それだけではない。

勇者が被るヘルメット。その正面には様々な個人情報映し出されていた。

それらは全て、視界に入る仲間、および、神罰商会が持つ敷地に住む者達である。

なので、半獣半人の者達はもちろん。天使、妖精などのゲームではお馴染みの者や、割と身近に感じられる猫……の耳を頭に持った娘などがいる。

「何か凄い賑やかだな」

若干息苦しいとも思ったが、言わないことにした。

「神罰商会は種族間の差別は一切ないんです。だから食事も皆で行えるんですよ」

「さっきのドラゴンもか？」

「はい。ドラゴンや大天使などの大型の種族は、学園の外で食べますよ」

殲滅隊を含めたサポートメンバーが共に食しているのだとか。

「……というか、ここに表示されるこれ、消せないのか？ 目がチカチカするんだが」

「消せますけど、今も言ったように、神罰商会は仲間意識が非常に強いので、名前などは覚えてあげてください」

「とは言われても、こんな膨大な数の仲間を覚えるのは難しい話だ。最初はこれに頼るしかなさそうだな」

「そういうことです。慣れれば自然と頭に入りますよ」

「それまでに頭がパンクしそうだけだな」

色んな席を見渡していると、一人だけで食事を取っている者がいた。

短めの黒髪。上はボーダーラインの入ったTシャツ。下はダメージジーンズ。何故か鉄で出来た首輪を付けていた。

「聖人……」

情報にはそう記されていた。

と、食券を持ったミナコが帰ってきた。

「ギルド君には関わらない方がいいですよ」

あんなに仲間意識どうこう言ってたのに……と勇人は思ったが、どうも私情で理由ではなさそうだ。

誰も彼の席に寄り付かない。

「……よくわからん」

「それよりも早くご飯を済ませましょう。早速、勇人さんにも任務に出てもらいますから」

ラウンド18 アストラル界隈の交渉戦

異空間ゲートを使って、勇人とミナコは中央区に向かった。

近未来的なビル群が並ぶ中央区。自分よりも何十倍も大きいビルが所狭しと並んでいて、そんな光景に勇人はただただ圧倒されていた。

ミナコはシックなブラックスーツ姿に、ジュラルミンケースを片手に持っている。完全にビジネススタイルだ。

「いいですか、勇人さん。勇人さんは何があっても喋ってはいけませんよ」

念入りに、顔を近づけてまでしてミナコは言う。

来る途中、再三言われてきたことだ。

来る途中といえば、異空間ゲート。あれは便利だった。

場所から場所へ運ぶエレベーターと違い、空間から空間へ運ぶのが異空間ゲートである。

きつちりとした座標は指定しなくても、行きたい空間を言えば自動で運んでくれるのだ。

「正体を知らねないためだろ。もう二十回は聞いたぞ。その話」

ビル群の中に入っていく二人。高いビルが並びせいで、どこも日が差さなくて薄暗い。

「勇人さんは人より少し……いえ、いっぱいおかしな部分が目立ちますから、これぐらい言っておかないと駄目なんです」

「だったら、その『勇人さん』も止めたほうがいいんじゃないか。

——ほら、言ってただろ。ブラックマスターにするとか何とか」

「いちいちブラックマスターと呼ぶのは面倒です」

「自分で決めといてそれか」

「神と呼ぶのも胡散臭いので、仕方ないですが、仕事上ではマスターと呼ぶことにします。特別ですよ？」

ミナコは無い胸を主張しながら言ってきた。

「まあ、好きにしてくれ。……で、任務って何をするんだ？」

「魔界全てにある勢力と交渉をするのですよ」

「交渉？」

「神魔聖杯はより多くの権利を握った方が勝ちなので、こうやって一つ一つ勢力と交渉をして、今後も神罰商会の傘下でいてもらえるようにするんです」

「なるほど。それが勝ち点1に加わるわけか」

「そういうことです。勢力は事前にアイテムを渡されているので、交渉成立ならアイテムを獲得できますよ」

「でも、それだと相手も交渉しに来るんじゃないか？」

「むしろそうなることがほとんどですね。結局は戦いで勝敗を決めることになりますよ」

ニコツと笑顔を浮かべるミナコの首もとには、十六夜が輝いていた。なるほど。常に臨戦態勢でいるということか。

（……とは言っても、勇人さんにまた神格化されては手に負えないので、なるべく穏便に済ませたいところですね）

ふと、ミナコは己の記憶をたぎった。

履き替えたパンツは……大丈夫。子供向けじゃない。

「どうしたんだ？」

「い、いえ！ 別に！」

（幸い、勇人さんの中で妹さんのパンツが焼けた事実が消えているみたいですよ——）

神格化は避けれるでしょう。

「さっ、始めはここからです」

地上十階。その頂点。

これ見るとばかりにでっかく掲げられた看板には、こう記されていた。

大神製薬、と。

ラウンド19　白衣の悪魔と毒りんご「マリア」

そこからはどこか危険なニオイがした。

そう連想させる要素が、そこかしこに散らばっているからだ。

真夜中の病院のような、照明のついていない廊下。

足首あたりをすり抜ける煙はひんやりとしていて、霊的なものに撫でられている感覚にさえ感じる。

「こんなところに人なんているのか？」

ふとした疑問さえ浮かぶ。

「いるから交渉に来てるんじゃないですかー」

段階的に、ミナコの中ではそんなの入る前からクリアしていて。むしろ、気配を張り巡らせていた。

（今のところ、悪魔の反応は感じない）

ようやく明かりが見えてきた。あの部屋に交渉相手はいるみたいだ。二人は早速、中に入った。

「お久しぶりです。ドクター＆マリアちゃん。神罰商会のミナコ」
ロックベルです」

そこには、極端に細長い男と極端に小さい少女がいた。

男は白衣を着ていて、見た目とは相反する不健康面を浮かべている。たぶん、本人は何ら異常はないのだろう。

少女の方は非常に愛くるしい。童話の中の小人のような可愛さ。しかし、ゴスロリ系の黒いドレスのせいで、若干の腹黒さを感じる。

ドクターとマリア。

（まんまだな）

と、勇人は思った。

部屋の中は意外と閑散としていた。資料の山で埋もれてたりはしておらず、学校の理科室と同じように均等に並べられた机でほぼ占められている。

しかし、このずっと嗅いでたら胸焼けしそうな薬品の臭いだけは、

やっぱりイメージ通りだった。

「いやいや、噂には聞いてましたが」

大木のような巨体が、勇人に迫る。

（ちかつ！）

「あなたが神・アルトウクスですか。私はドクター。こちらは助手のマリア。お会いできて光栄ですよ、ふふふ」

不気味だ。

だが、それに限らず、喋るのは禁止だ。

勇人は無言で握手を交わすだけにとどめた。

「……それでドクター。次期契約の方は既に？」

「いやいや、私は悪魔から脱け出した身ですから」

二人が話していると、小柄なマリアが勇人の背後につき、メス的なものをつきつけながら、ぶつぶつと何かを唱えていた。何か気に障ることをしたのだろうか。

「では、来期も契約は継続をお願いします」

「できれば、研究費用を上げてほしいんですがねえ」

「マスターに相談してみます」

「もう一つ、神の体を……」

「それは無理です」

食い気味できっぱりとミナコは断った。

「いやいや、手厳しいですねえ」

ミナコはジュラルミンケースを机上で開けて、中から重要な資料を数枚取り出した。

「では、契約継続ということでここにサインを……」

その時だ。

「——蛇神！^{ヘリガミ}」

ミナコに殺到する、四本の黒い流動体。

勇人の脇を抜け、そいつらは目標に襲い掛かる！

ラウンド20 蛇神浪花との戦い（1）

ミナコは机上のジュラルミンケースを投げるように取った。バラける資料の中を、四本の黒い流動体が抜けてくる。

ミナコはジュラルミンケースで流動体を受け止めた。損傷は見られない。だが、そこに強烈な重みが負荷される。

「っ……………！！」

ミナコはジュラルミンケースを離してしまった。

ズン……………！

物凄い震動。床に亀裂が走る。

「まんまと引つかかったのう、中の下」

後ろで花型に結られた黒髪。赤紫の着物。草履を履いたその侍のような男。

「蛇神“浪花”」
なにわ

浪花大輔。またの名を、蛇神浪花である。

「悪いが、契約は中止や。ルールに則って、どちらか勝った方と契約してもらう。ええな？」

浪花はドクターを見た。

「ふふふ、仕方ないですねえ。それが神魔聖杯のルールなのですから」

ただし、とドクター。

「ここには大切な研究資料があるので、戦うのでしたらここ以外でお願いしますねえ」

その間、ミナコは部屋を出ていた。

「頼まれんとも——ハナからそのつもりみたいやで！」

途中、ミナコと合流して勇人も出ていった。

*

薄暗い廊下。ここで蛇神を使われるのは厄介だ。

二人は走り続けながら、

「外に出るのか？」

「ルール上、交渉先で起きたトラブルは交渉先内での解決です」

「外には出れないってことか」

「勇人さんは手を出さないでください。正体がバレたらまずいので」

「戦えるのか？ ミナコ一人で」

「ミナコは十六夜を解放した。基本形態。第一解放である。」

「やるしかないんです」

「この通路は狭い。ミナコは適当な部屋に逃げ込んだ。」

「勇人も後を追って入り、部屋のほぼ中心に移動した。」

「策はあるのか？」

「蛇神は触れた物の重量を上げるアイテム。一本でも多く触れれば、それだけ重量も上がってしまいます」

「じゃあ、その十六夜は使わない方がいいんじゃないか？」

「十六夜は“奥の手”です。蛇神の弱点は触れる前に触れさせてしまふこと。つまり、そこら中にある物をぶつけてしまえばいいのです」

「じゃあ、その役は俺がやろう」

「……あのー、ミナコの話聞いてました？」

「聞いてたが？」

「じゃあ……！」

「でも、駄目だ」

「勇人は言う。」

「飯もタダで食わせてもらって、部屋も貸してもらって、その上、戦わなくていいなんてのは、ミナコがよくても俺が駄目だ」

「気持ちわかりますが、今は正直、ありがた迷惑なんですよ。勇人さん」

「恐縮気味にミナコは言うが、違う。それでもだ」

「——俺は、ミナコの仲間だ」

ラウンド21 蛇神浪花との戦い(2)

遠くから足音が聞こえる。

カッン、カッン……と、こちらに近寄ってきている。

部屋を中心、大きめの机の下に勇人とミナコは隠れていた。歩み寄る足音に聞き、自然と緊迫感が増していった。

通過すれば、そこを狙う。

見付かれば、叩く。

どちらでも動ける体勢を維持し、そして、その時は来た。

カッン……というは消え、

「！」

浪花は駆け出した。

部屋の入り口。崩れた体勢から蛇神を撃つ。

「隠れても無駄じゃ——蛇神……！」

四本の黒い流動体は、一点、二人が潜める机に殺到した。

まるで磁石で吸い寄せられているように、四本全てが空いた空間

——椅子を収める場所に向かった。

そこには二人がいる。

やむを得ない。ミナコは動いた。

低い体勢を維持しながら、浪花に接近する。

接近戦で弓は使えない。

駄目押しするように勇人も動き出す。

その進行方向は、浪花とは真逆。逃げているのではない。寄せ付けているのだ。

——“蛇神”を。

「！」

あの時、勇人は提案を拒否されていた。

「分かりました。なら、仲間である勇人さんを信じて戦いましょう」

「よし、任せろ」

「ですが、そんな重要な役は任せません」

「仲間なのにか!？」

「仲間どころではなく——」

ミナコはズバリ突きつけてやった。

「勇人さんの戦闘レベルは1だからです!！」

「なっ……!」

勇人の中に落雷にも匹敵する衝撃が走った。

「レベル1の勇人さんには当てることなんてできません。できることはただ一つ——」

背後から勇人を狙った四本の流動体が迫ってきている。

(逃げる……か!)

蛇神は目標を追尾する能力を持つ。

その際、今のように目標が分散した場合である。

目標まで最短距離の目標の方を追尾するのだ。

「ミナコは日々進化してるのです!」

ミナコは十六夜を抜いた。

「どこが進化しとるんや、貧乳」

その時、作戦は崩れた。

「! ミナコ!」

蛇神の追尾の対象が変わった。

ミナコを対象とし、蛇神は追尾をした。

「わいやって進化しとるわ。中の下」

浪花は言う。

「蛇神“レベル2”や」

ミナコに迫る四本の流動体——蛇神。

勇人はとっさに背後の戸棚からビーカーやらスポイトやらの実験用具をがむしゃらに取り出し、蛇神に当てるつもりで投げた。

だが、蛇神の速さに追いつかず、投げたそれらは全て床に散った。
ガシャン……!

激しく割れる音に目を瞑った勇人。

ゆつくりと開いた時、見た。

中は白く、外は赤く。

焼けるようなフォルムへと変化した——“刀”。

十六夜である。

「昔は第一開放が限界でしたけど、言ったじゃないですか」

迫り来る流動体など気にも止めずに、ミナコは喋っていた。

「ミナコは日々刻々と進化してるんですよ」

第二開放——ミナコの口からそれが告げられる。

刀身で発する猛烈な光を叩きつけるようにミナコは——

打つ……！！

「ミナコエクスプロージョン！！」

ニイ、と笑うミナコ。

その不気味な笑顔を照りつける光。

瞬間、ミナコを中心とする半径一メートル圏内に爆発が巻き起こった。

「なんやそのちんちくりんなネーミングは！？」

爆発に食われた蛇神は姿を焼失し、それが決定打となったのだらう。

「つて、蛇神！」

浪花の手から蛇神が——アイテムが姿を消えていった。

長時間かけて溶けた氷柱のように、幻想的な光を零して、蛇神は

浪花の手から姿を消した。

「消えましたね、アイテム」

「なっ、まだ戦え……」

「戦えません。いいえ、戦えないのです。アイテムを破壊されたプレイヤーはその時点で負け。それが神魔聖杯のルールじゃないですか」

ミナコは宣言する。

「この勝負、ミナコ達の勝ちです！」

ラウンド22 墮天使がやってきた

ポン！

「はい、では、これで契約手続きは完了です」

につこり笑顔のミナコ。つい数分前まで激闘を繰り広げていたとは思えないくらいに晴れ晴れしい笑顔である。

ミナコをそうさせるのは、言うまでもなく契約同意の印を貰ったからだ。

ひょうきんなやつだ。と、勇人は口に出さずに思っていた。

「いったいどんな手を使って勝ったのか、気になりますねえ」

と言うドクターの視線は明らかに勇人を向いていた。

その間に素早くミナコが。

につこり笑顔を崩さずに、

「では、これからも神罰商会をよろしくお願いしまゝす

勇人を強引に引つ張り、猛スピードで姿を消した。

「いやはや、手厳しいですねえ」

*

勇人とミナコは次の取引先に向かうべく、足早に階段を下りていた。

「凄かったな、ミナコ」

「あれぐらい当然です」

スーツ姿とその台詞がよく似合う。

「でも、いいのか？」

階段を下り、出口へと向かう。

「アイテム壊しちゃって」

「殺すよりはいいとミナコは思いますけど」

「なるほど。その二択ってわけか」

アイテムを壊すか。

相手を殺すか。

「選べるだけ、前身の頃よりは断然いいですよ」

外に出て、薄暗い空気からようやく解放された。

照りつける太陽に背伸びをしながら、ミナコは疲れを抜いていた。さあ、張り切って次の取引先に行こう。そんな時だ。

「っおお！」

勇人が被るヘルメットの画面に、通信が入ってきた。

「ミナコ、何か来たんだが」

それは、ミナコにも届いていた。

エフ——殺戮人形からの緊急支援要請。

現実世界で言うところの携帯電話をミナコは取り出し、メールなのだろう。文面を声に出して読み上げた。

「現在、アークス聖十字学園中央に堕天使の侵入を確認。交戦中につき、至急、本部に帰還するよう命ずる」

「何かまずいことになってないか？」

「……早く帰らないと」

ミナコは事の重大性を認識している。

堕天使。その強さは、下から数えるより上から数えたほうが断然早い。

つまり、そういう種族だ。

「本部が壊滅されてしまいます！」

ラウンド23 墮天使ミカエルと大人パンツのミナコ

本部に帰還した二人。

「ただいま戻りました！」

中央に移動すると、そこはとんでもない事になっていた。

「み、みんな……」

見慣れた仲間達が、揃いも揃って巨大な檻に閉じ込められているのだ。

あろうことが、あのアダムまで。

「……………」

緊迫した空気の中で、どうもアダムだけ場違いな格好でいるのが気になる。

まさかとは思ったが、恐る恐る尋ねてみたミナコ。

「あのー……、マスター」

——何で裸なんですか？

「それがよ、シャワー浴びてたら捕まっちゃってよ」

大方予想通りの答えにミナコは涙を流していた。

「マスター……………」

現状、ともに戦えるのは誰もいないということになる。

フロアの中心にいる、黒いドレス姿のグラマラスなボディの女。

黒い短髪。青黒い瞳。

その右手に持つ稲妻のような形をした槍は、神に一撃と与えたと言われるレアアイテム『ロンギヌスの槍』。

「シャレになってないです」

愕然とするミナコ。

諸悪の根源であるそいつの名は、墮天使ミカエル。

(とりあえず、この場に殺戮人形がないので、どこかに隠れてい

るとして……）」

今のところ、ミカエルは仲間は一切の手を出していない。

目的は他にあるのかどうかはわからない。

いずれにせよ武器を構えている時点で、少なからず敵意はあるわけだ。

（ミナコはどうすれば——）

ふと、それが視界に入る。

勇人だ。

そういえば、ミナコの他にも勇人が戦える。

戦えるが、戦力外だろう。

「……っは！」

ミナコはひらめいた。

神格化。

勇人さんを神格化で天神モードにさせれば……

だが、神格化にはリスクがある。

不意にミナコは、今日、自分が履いてるパンツを思い出していた。

（大人パンツ……）

神格化の条件である、子供パンツではなかった。

（ミナコのバカ〜！）

こんな時に大人パンツを履いてしまう自分にミナコはやるせない気持ちで一杯だった。

しかし、現状。

「……………」

勇人に頼る他はない。

「……勇人さん」

賭けてみるか？

山場も山場。もう残りチップは一枚。一発勝負の大博打。

ミナコは場違いな行動に出た。

ベルトを外し、ズボンを下ろし、そして——

「お願いします」

見せた。パンツ。大人パンツ。

御来光にも負けない輝きを放つ——無地のパンツ。

（無理か——）

「——ふはははは！！！」

勇人が天神モードに入った。

即だった。

ミナコの大人パンツは、まだまだ子供パンツだった。

「堕天使ミカエルか。ようやくまともな悪魔が現れたな」

スコーン！ という快音は勇人の頭から。

「誰だ！ 神であるこの俺の頭を狙う輩は……」

振り返ると、そこにはプライドをズタズタどころか粉々に碎かれた涙目のミナコがいたという。

ラウンド24 神vs墮天使

今さっきまで戦意を感じなかった墮天使ミカエルから、瞬間、強烈的な戦意を——否。殺意を感じた。

むこうの狙いは、どうやら勇人のようだ。

厳密に言えば、その器に入った中身——邪神だ。

構える。ロンギヌスの槍。

上段。肩より上へ。

狙いを勇人に定め——

「おもしれえ」

踏み込む。勇人は脚のバネを最大限利用し、弾丸の如くミカエルに突撃した。

走る白電のライン。

ミカエルのロンギヌスの槍が勇人を襲う。

「勇……アルトウクス神様！」

ミナコの叫びを背後に、勇人が取った行動は——

ドン……！！

両サイドを襲う猛烈な衝撃波。

勇人はロンギヌスの槍を拳で相殺してやった。

凄まじい衝撃波に建物の壁が揺らされる。

そんな中に響き渡る打撃の音色。そして風。突風。

その中心で踊るように、勇人と墮天使が戦っていた。

墮天使はロンギヌスの槍を器用に振り回しながら、攻撃を受け流す。

受け流されてもなお、数で攻撃するのが勇人。

誰もその領域には入れない。

接戦の不利さを感じさせない、見事な槍捌きだ。

＊

ギルド＝ペインウォーカーは堪らなく嗤っていた。

短い黒髪。ボードーシャツ。ダメージジーンズ。鉄の首輪。

彼を表すその記号を前に、一人の召喚士は怯えていた。

召喚士の正装——黒衣を頭から被るスタイル。占い師のような格好をしたその男。

彼の背中には道がない。比喻ではなく、本当にだ。

中央の外れ。いよいよをもって手摺の奥にまで追い込まれてしまった。

「えーと、つまりなんだ？ テメエは頭に変装して、その間に神を奪おうって算段だったわけだ」

威圧的な、低い声。

「……そうだ。だがもう遅い。墮天使を召喚された時点で我々の勝ちだ——っッ！？」

瞬間、迫る。

いた。目の前。

ギルド＝ペインウォーカーが。

距離は結構あった。十か……八か……いや、いずれにせよ一瞬で行ける距離ではなかった。

なのに——

「なのに、何故、お前がここ……ンン！？」

ギルドは右手で召喚士の口を塞いだ。

「勝ち？ 勝ちってことはつまり、お前はもう勝ったんだよね？」

流れ込む、絶対零度の冷氣。

「是非とも御教授願いたいねえ。肺の焼けた人間の必勝法ってやつを」

「ンン！ ンン！」

「慌てんなくて。まだ肺には届いちゃいねえさ。じきに……そう」

「」

召喚士の体が崩れ落ちた。

「もうすぐやってくるさ」

絶対零度の冷気で臓器を焼かれた召喚士が、生き返ることはなかった。

ギルドは窓の外を見た。

「……さて、メインを拝みに行ってくるさ」

やがて、召喚士の体が内側から白く固まっていき、凍らせた薔薇のように砕け散った。

ラウンド25〜最大解放〜

神と墮天使。

両者譲らぬの戦いは、早一時間を経過していた。

互いに疲れの顔を見せず、まだまだやれるといったところ。

しかし、周囲はもう限界で。特に建物はその戦いによって生まれ
た突風の反動に崩れかけている。

かなり頑丈には造られているが、二人が強すぎるのだ。

「アルトウクス神様！ もう建物が持ちません！ 早く決着を！」
物陰に隠れるミナコからの要求。皆が頷く。一人ではなく総意と
いうわけか。

勇人はそれらを確認し、言われた通り、決着をつけることに、
ほぼ同じバランスで保たれていた戦闘レベル。

しかし、瞬間、バランスは崩された。

「！」

バックステップを踏む墮天使。甘い。そこはまだ神の領域だ。

「ウルアー！！」

低い体勢から、墮天使の腹部に強烈な一撃が。

「つぐ……！！」

合わせて繰り出した墮天使ミカエルのロングヌスの槍。
交差するように。しかし、リーチの違いがそれを上回った。

「ア……アルトウクス神様！！」

ミナコの悲鳴にも似た叫び。

勇人の拳よりも先に——ミカエルのロングヌスの槍が届いていた。
左の脇腹を、ぐさつと。

勝った。そう喜んでいいはずだ。

しかし、何故だろう——

ミカエルは酷く怯えている。

まるで化け物でも見たみたいに。

化け物？ 馬鹿言っちゃいけない。

「俺を誰だと思ってやがる」

お前が戦っているのは人間でも化け物でも、まして悪魔でもない。

——神だ。

「……っけ」

遠くで観戦していたギルド・ペインウォーカーが、その場に背を向けた。

勝利を確信したように。

神は。

勇人はロンギヌスの槍を脇で受け止めていた。

一方のミカエル。槍を抜こうにも抜けない。強く締め付けられているからだ。

「借りるぜ」

勇人はロンギヌスの槍を奪い取る。

手に握ったその時、覚醒したようにロンギヌスの槍が激しい白電は纏った。

纏ったそれが槍の形状のように鋭く尖る。

「お前にはこいつはまだ早い。こいつを使いこなせるのは、この俺だけだ」

全長十メートル。ロンギヌスの槍が最大限力を発揮する。

「喧嘩を売る相手を間違えたな。——出直してこい！ 堕天使……」

「！！」

迫る。迫る迫る迫る——

「ッあああ……！！」

ミカエルの腹を突き上げ、突き上げ突き上げ突き上げ——天井。壁を破壊して吹き飛ばされた……！！

ラウンド26 神罰商会の最強

魔界。ブラックマーケット街。

荒んだ雰囲気漂うその場所。

「――紅蓮煌！」

そのの、一直線のアーケードに凄まじい猛火が通過した。

ゴオオウ！

轟音の中で、閉ざされたシャッターを叩く音。

バチバチと弾けた音が拍手喝采のように響き渡る。

静寂だったブラックマーケット街が、途端、騒がしくなった。

距離は五十メートル。紅蓮煌の先には、一人の男がいた。

黒い短髪。ボーダーシャツ。ダメージジーンズ。鉄の首輪。

ギルド＝ペインウオーカーだ。

呆気なく、ギルドは紅蓮煌の流れに飲み込まれた。

「炎の前に氷は意味を成さない！ 分かったか！」

紅蓮煌が突き抜ける。

「！？」

突き抜けたそこに、平然と立っていたギルド。

普通なら黒炭確定な大怪我。なのに、ギルドはそれはおろか火傷

一つしていない。

まったくの無傷だ。

「つ……！ 化け物がああ！！」

魔界商会のその男が怒り任せに紅蓮煌を乱発してきた。

何度も何度も――同じ“過ち”を繰り返した。

「化け物？ いいねえ。その響き」

まったく効いてないと知らず。

「けどよ、化け物を狩るには化け物も連れてこねえと成り立たない
だろ」

一定の距離。ギルド本体から周囲三メートル圏内。そこだけ紅蓮

煌が外れていた。

違う。外れたのではない。当たらないのだ。

ギルドが持つ能力『絶対氷結領域』により生まれた壁によって、大気中に飛散する微量の水分。そこから強靱な壁を生むことなど——ギルドにとって造作のない話だ。

つまり、こういうことだ。

格が違い過ぎた、と。

「ひっ……！」

男は逃げ出した。

「おいおい、まだ終わってねえだろ」

声は男の真横から。

「っっ……！？」

一瞬にして五十メートルの差を埋めてきたギルド。詰め寄ったその先ですかさず蹴りを食らわしてやった。

男はシャッターに叩きつけられ、型が残るくらいめり込まれた。抜けない。同時にシャッターに残る紅蓮煌の熱が奇しくも己を苦しめていた。

「い、命だけは！……！　そうだ！　アイテム！　アイテムを渡す！　それで——」

ギルドの腕が伸びる。男の胸を突き刺し、心臓を掴む。

「がはっ……」

「馬鹿だなあ、お前。アイテム奪ってもお前が残るだろ。王を守る兵が——壁が一枚、増えちまうだろ？」

「っ、っ……ッ……！」

「おや？　嬉し泣きかい？　いいねえ。王を敬うその気持ち」
ギルドを握り潰す勢いで心臓に力を加えた。

「——最高に燃えるねえ」

ほんの一瞬。

まばたきするより早く。

男の体は氷結にされた。

内側から焼かれていく体は、やがて、己が撒き散らした熱風により、その姿を失った。

*

宣言。

『今日からミナコは“せくしー路線”でいくのです』
だそうだ。

アークス聖十字学園。その中央では先日、墮天使ミカエルとの壮絶な戦いがあった。

何とか戦いには勝利したものの、その際に破壊された個所は多く、特に頂上付近のあの大きな穴は、今日一日で修復させるのは不可能だろう。

そんなこんなで今日は神罰商会総出で修復作業をしている。

たった今、せくしー路線に転向したミナコを筆頭に、勇人、エフが頂上付近の修復作業をやっている。

「にしても……スカート短すぎじゃないか？」

しゃがめば完全に中身が見えてしまうくらい、ミナコのスカートは短くなってた。勇人も直視できない。

「ミナコはもう子供じゃないから、これぐらいがちょうどいいのです」

急にだ。

急にこんなことを言い出してのだ。

「……何かあったのか？」

小声でエフに訊く勇人。

「思春期です」

エフの解答はそれだった。

「……………」

下がざわついていた。

見ると、ギルドが帰ってきていた。

皆が恐がり、近寄らない。知らんぷりをしている。
ギルドもまた、そんな者達を相手しない。

「おい、ギルドー」

そんな中、思わぬ声が頂上から――

「！！ 勇人さん！」

皆がぞつとする。あのギルドに勇人が声をかけた。

しかし、皆がぞつとしているのは声をかけたからではない。
今の勇人は正体を隠し、アルトウクス神として通っている。

つまり、この行為はギルドへの宣戦布告――とも受け取れる。
少なくとも皆はそう受け取っていた。

だが、そんなことは関係ない。

ミナコは勇人を身を隠せとばかりに叩きつけた。

「何やってるんですか！ 勇人さん！」

「ん？ いや、ギルドも一緒に修復作業やらないかと誘ってみるつもりだったんだが」

「死ぬ気ですか！？ ……ミナコ。驚きのあまりポロリしそうになりましたよ」

「パンツ見えてるぞ」

「ひゃああああ！？」

「処女の反応です」

仲良くなれないものか。

立ち去っていくギルドの背中を見て、勇人はそう思っていた。
「というか、見られるのが嫌なら長いの履いてくれ」

ラウンド27 残念系に一步及ばない残念系ヒロイン

ミナコがスカートの下にジャージの長ズボンを履いて、脱せくし
―路線を宣言すると、場に笑いが起こって―

そんな微笑ましい光景を、サテラ＝サテライトは見ていた。

―――暗幕の傍で。

光を遮る為の暗幕。決して身を隠す為の道具ではない。

そもそもサテラは隠すには少々派手過ぎるのだ。

長い金髪。解放感ある黒いドレス。レース状の生地が随所に散り
ばめられたそこからは、大胆にもふつくらとした胸が見えていて、
白い肌もまた華やかさを増すのに一役買っている。

こんな姿で尾行でもしたら、まあまず見つかるだろうという容姿
だ。

「……………」

実のところ、勇人はずっと前からサテラの視線に気付いていた。
しかし、その視線があまりに刺々しく、邪氣的なものを感じるの
で、ちよつと話しかける気にはなれなかった。

サテラはミナコを見ている。ずっと見ている。きつとあの輪の中
に入りたいのだろう。

「……………」

そんな思いが通じたのか、ミナコがようやくサテラの視線に気付
いた。

「あれ、サテラじゃないですかー？」

気付いたミナコがサテラをこっちに来るよう呼んでいる。

「一緒に手伝ってくれるんですか？」

「だ、誰があなたの手伝いなんて！」

右手。工具箱。

左手。替えのガラス。

「準備いいな」

「たまたまです！ たまたま！」

たまたま工具箱と替えのガラスを持っていることは、人生でもそう経験することはないだろう。

というより、ない！

ともかくにもサテラが輪に加わった。

「あなた。いつの間にアルトウクス神様とこんなに親しくなったの？」

「ずっと前からだよ？」

「ずっと前からアルトウクス神様と親しいわけないでしょう！」

ミナコは勇人を見て。

「サテラはイタ子なのです」

「そんな雑な友人紹介で済まさないでよ！」

「イタいのは認めるんだな」

ミナコのリードのおかげで、何とか正体はバレずに済んだ。（サ

テラ＝サテライト）

勇人が被るフルフェイスのヘルメットの正面には、様々な個人情報が表示されていた。

後々に設定し直し、プライバシーに関わる部分は非表示モードにしている。

（別名“月姫”か……）

ラウンド28〜よくない〜

勇人とミナコの二人は、昼休みに入ることにした。

サテラとエフは、それぞれ別のグループと行動することに。

二人と別れた二人は、大食堂に赴いた。

昼時とあつて、大食堂は非常に賑わっている。

サンドイッチなどの軽食を購入し、袋に入れてもらい、——ミナコの私室に運んだ。

「ふう」

と、大きな溜め息をついて、勇人はヘルメットを外した。

その間、ミナコはテーブルに昼食の準備をしていた。

サンドイッチやポテトなどのサイドメニュー、それからジュースを置いた。

「なあ、これ、いつまでやるんだ？」

「ずっとですよ？」

「ずっととは無理だろう。先日のアレで別人疑惑が出てるんだから」
「チュー、とストローでジュースを飲むミナコ。」

「皆さん、勘がいいですね」

普通は気付くだろう。と思うと同時に、ミナコのおバカ加減を知らされる勇人だった。

「正直、みんなに嘘をついてるのはよくない……というより、気分が悪い」

「それはそうですけど……」

「早いうちに明かして、みんなとは隠し事なしで、正面から接したい」

そうすれば……、勇人は小声で呟いた。

その言葉の裏には、ギルドの存在があった。

「……わかりました。勇人さんがそこまで考えているなら、ミナコも考え直します。——でも、今はとにかくご飯にしましょう。午後

「まで体力が持ちませんよ」

*

午後も修復作業の続き。

サテラとエフとも合流し、作業を続けた。

勇人は変装したまま、作業をしている。すぐにはいかない。楽しく談話を交えながら、作業を続けて――

途中、サテラが作業を中断し、立ち上がった。

「トイレに行くの？」

「仕事よ。相手先と会う約束してるの」

「じゃあ、後は俺達でやるか。サテラも仕事頑張ってくれ」

こうして、サテラは作業を抜け、相手先との交渉へと向かった。

ラウンド29 忠告無視！

「では、契約は継続とさせてもらいます」
交渉は、無事、成立した。

大手住宅会社との交渉を終えたサテラ。
十階建ての高層ビルの最上階から下へ、エレベーターを使って移動する。

密室空間。そこには、サテラともう一人、ギルドがいた。
ギルドは場には同席していない。単に参加する気がないのだ。
サテラはもちろんのこと、相手先もできれば参加はしてほしくないと思っている。

通常なら同席しないほうが失礼なのだが、血生臭い噂が立たないギルドの場合、欠席大歓迎というわけだ。

エレベーターが降りる。ガラス越しからビル群が見える。
互いに距離を空け、下に着くのを待つ。

一階。下に着いた二人がエレベーターから出てきた。
会社を後にする。

炎天下に晒される二人。サテラは次の交渉先をメモを見て確認していた。

すると、隣から――

タツ、タツ、タツ……

ゆったりとした足音が。

見ると、ギルドが帰路を歩んでいた。

「まだ仕事は残ってるでしょ!？」

しかし、ギルドは何も言わない。

ただでさえ厄介者なのに、面倒までかけさせられたら――

「……ッ」

やってられない。

「好きにすればいいじゃない。そうやって一人でやってれば相手さ

れると思ってるんでしょ？」

ギルドは足を止めない。

たぶん、何を言っても止まりはしないだろう。

「——そんなんだから、親にも見捨てられるのよ」

たった一つ、それだけを除けば。

バキンッ……！！

ハッと目を見開くサテラ。その背後に巨大な氷柱の壁が立っていた。

たった今、出てきたばかりのビルにも劣らぬ高さだ。

「家族ごっこは外でやってろ、クソアマ」

ごめんなさい、マスター。サテラは小さく呟いた。

「家族を知らないあなたに——何を言われても響かないわ」

言葉の後、サテラの長い金髪が更なる輝きを帯びた。

その輝きは、まさに月。月光。

——月姫なり。

「愉快に尻尾振って逃げたりやあ見逃してやったのによ」

瞬間、背後の巨大な氷柱の壁が粉々に粉碎された。

飛散するミスト状の氷の飛礫が、日差しによって存在を主張し、

月姫を引き立てる輝きとなった。

「責任もって死ねよ。噛ませ犬」

ラウンド30〽絶対氷結領域vs月姫〽

先制はギルド。波を描くように右腕を切ると、床一面に色濃い冷気が溢れ出た。

津波のように襲いかかるそれを、サテラはバックステップの繰り返しで躲す。

津波は追撃を止めず、いよいよサテラを建物まで追い込んだ。後ろはない。サテラはビル群の中に潜った。

ギルドは津波の対象を、サテラからビル群へと変える。

足元からビルを薙ぎ倒していき、最短でサテラを追い込む。

その光景を目の当たりにするサテラは、開いた口が塞がらなかった。

（他人のことなんてお構い無し）

逃げれば被害が拡大する。ならば、選ぶ道は一つしかあるまい。月姫が動く。

方向転換。倒れるビルの中を高速で潜り抜け、ギルドに接近する。長い金髪を刃の形状に変え、振り抜く。

ギルドはバックステップで躲した。

「俺に接近戦持ち込むとは、役割を理解してんじゃねえか。噛ませ犬」

ポケットに手をつ突っ込んだまま、刃と拳の応酬を躲す。

時折ラッシュを繰り出すが、氷の壁に防がれる。

その度に氷霧が溢れ出す。

「髪の毛の性質、形状までを自在に操るのが、お前の力」

応酬に遭う中、ギルドはサテラの髪を掴んだ。

「……ッ！」

刃の髪。触れれば肉は切れる。が、ギルドの手は自身の能力——絶対氷結領域によって守られていた。

「が、厄介なのは力じゃねえ。厄介なのは、その髪の毛の長さ」

掴んだ髪が、毛先から徐々に真っ白に、凍り付いていく。

その先は、頭。脳——急所。

「！」

死が浮かんだサテラが、首を振って、自ら髪を引きちぎった。

バキバキ……！！

鳴るはずのない音が鳴る。

肩の辺りで、疎らに千切れる髪。

「どこ見てんだよ」

首を振るモーション。そこに打撃と共に言葉が届く。

「つぐ……！！」

腹部に、強烈な拳。

瞬間、サテラは吹き飛ばされた。

地面を何度もバウンドして、叩きつけられて。

途中、腕を折って、足を折って、腹を折った。

勢い止まらずビルに激突。一つ二つとビルを突き破って——十つ目のビル手前で止まる。

否。止められた。

氷のカーペットによって。

朦朧とする意識の中、サテラは目の前にギルドを見る。

ギルドはサテラの腹を、思いつきり踏みつけた。

「——ッっ！」

骨はなく、腹一枚で内蔵を踏まれる。

ぶよぶよの感触が、足の裏に伝わる。

「同じ組織に——お前らの言葉を借りれば、仲間、か」

ギルドはサテラの口を右手で塞いだ。

「仲間なら殺されないと思ったか？ 履き違えるなよ、クソアマ」

キスでもするような距離で、ギルドはサテラを蹂躪する。

「俺は、お前らの仲間じゃねえ」

サテラの体が、真っ白に、燃え尽きる。

ラウンド31 最強の最弱

青黒い夜のような廊下。

その奥に手術室がある。

行為の最中を表す『手術中』のランプが、消えた。

サー、という軽快な扉の音の向こうから、金髪の女医が出てきた。左右非対称の髪型。右は目を隠れ、左は額が全開。

格好は女医というよりはナース。黒いガーターベルトに包まれた美脚が、白桃色のナースの裾から晒されている。

背も高く、切れ長の目からは、どこか高圧的な雰囲気さえ感じる。

「！ ヨウコ！」

不安で心配で椅子にも座れなかったミナコ。

傍らの勇人を置いて、金髪ナースのヨウコの元に駆け寄った。

切羽詰まった表情で詰め寄ると、ヨウコから火のついたタバコを押し付けられた。

危つく額にジュツとされそうになったが、寸前で止まった。

ヨウコはタバコをくわえたまま、

「三パーセント」

と、言ってきた。

「サテラは、無事なの？」

恐る恐る訊いてみたが、ヨウコはあまり良い顔を見せない。

「生存確率は、三パーセント。五体満足で生活できるかどうかは、あいつ次第だな」

三パーセント。

その、あまりにちっぽけな数字が、ミナコには受け止められなかった。

言葉を失くす。

「……“アイツ”のせいだ」

悲しみはやがて、怒りへ――

「アイツが、ギルドがサテラをこんなに……!!」

ふう、と、ヨウコはメンソール臭い煙をミナコに吹きかけた。
けけけほ、と、噓せるミナコ。

「何をす……」

「落ち着け。アタシは医者だ。わざわざ患者を増やすような真似は
させない」

「黙ってろって言うんですか？」

「死なせるよりマシ」

死ぬ。その一言がミナコの頭の中を駆けずり回り、色んなものを
散らかして、放置していった。

酷く気分が悪い。

「私は——」

言葉の途中。

ドスッ

という鈍い音がした。

気が付くと、そこに勇人がいて、ミナコが気絶していて、彼が彼
女を抱えていた。

「神が女に手を上げていいのかい？」

「……俺は、ここに来て、まだ日が浅い。だから、みんなの絆の深
さとか、そういうのはわからない」

勇人はミナコは椅子に寝かせた。

顔を見る。寝ている。ずっと起きていたから。

だけど、その寝顔は苦しそうだった。

「だから、ミナコのしよとすることは理解できない」

腹を殴られたこと。確かにそれもあるだろう。

だが、もっと別の何かに苦しめられている気がした。

「だけど、俺はみんなと絆を深めたい。知りたい。だから、まずは
ギルドのところにいく」

ヨウコは蛇のような鋭い目つきで勇人を見た。

「死ぬぞ」

正面からぶつかなければ――

勇人は、ヘルメットに手をかけた。

そして、ゆっくりと外した。

天神モードでも、まして邪神モードでもない。

普通の高校生の天川勇人が、言う。

「俺は、神だ」

ラウンド32 無能力者の葛藤

勇人に迷いはなかった。

それは、足取りにも表れていた。

真っ直ぐ廊下を歩いていると、途中、左右の通路から白い軍団が現れた。

殺戮人形だ。

流れるように殺戮人形達が、総出で現れた。

真ん中の通路で合流し、二列になって、そのまま勇人の背中をついていく。

勇人が軍団を引き連れている。そんな画となっていた。

「サポートします」

先頭の殺戮人形が言う。

振り返らずとも分かる。肩に据えられたライフルの姿が。

合計二十八の殺戮人形達が皆、格好とは似合わないその物を装備している。

「気持ち嬉しい。だけど、銃は駄目だ。もしものがあつてはならない」

「実弾ではありません。中身は全てゴム弾となっています」

他の殺戮人形達が、続々と理由は話す。

「ギルド」ペインウォーカーの絶対氷結領域は、対一の戦闘なら、ほぼ無敵です」

「高い攻撃力に加え、高い防御力を持ちます。それは、核ミサイルも防げると想定されています」

「それなら、銃なんか使っても意味はないんじゃないか？ 威嚇にもなるし、俺は良くないと思う」

「我々は、絶対氷結領域の範囲外からサポートします」

「ゴム弾だろうと核ミサイルだろうとも、絶対氷結領域は一回の防御の度に、新しい壁を作らないといけないのです」

「我々が放つ二十八発の弾丸が、ギルドⅡペインウォーカーの絶対氷結領域を崩します」

「そこを狙ってください」

いまいち納得のいかない勇人。確かに無能力者の自分が相手をするには、サポートは必要なのだが。

「……やっぱり」

たとえ、死ぬ危険性がないとしても。

仲間に銃を向けるのは――

しかし、殺戮人形は言う。

「対話を持ちかけたいのであれば、それができる状態にしてください」

「我々が、それをサポートします」

腑に落ちない部分はある。

だが、それは妥協すべき部分なのだろう。

「すまない。力を貸してもらおう」

「いえ。それでは、具体的な作戦の流れを話します」

「まず――ギルドⅡペインウォーカーの弱点を先に告げておきます」

ラウンド33 外れた道を正す

ギルドがいた。

帰路を歩むその背後には、変わり果てたビル群の姿があった。今やそこにかつての面影はなく、ビルの墓場となっている。それらは全て、この男のしたこと。

しかしそれは、彼によって造作もないこと。

無理乱暴に力を使うだけなら、誰だって簡単にできるわけだ。

*

首輪の調子を気にしながら、帰路を半分過ぎくらいまで進んだ頃だ。

正面に、見知らぬ男が立っていた。

勇者だった。

際立つて変わった個所のない、道路の真ん中。

時間的に無人。いるのは、勇者とギルドだけだった。

ギルドは、据えるように勇者を凝視し、途端、口元を緩めた。

「お前か。神とかほざいてたやつは」

完璧に変装していた勇者だったが、ギルドには気付かれていた。

神のオーラとも言うべきものが、まったく感じられなかったからだ。

「知ってたんだな」

ギルドは言葉を見せず、一言一言を強調するように。

「で、なんの用だ？」

殺すような気迫で、勇者を睨みつけた。

しかし、勇者は一步も引かない。

「知ってたのかと聞いている」

この程度だったら遊ぶ気にもなれなかったが、多少は根性はある

ようだ。ギルドは評価を改めた。

「俺は、あいつらほど間抜けじゃねえからな」

「いいところあるな。お前」

「ここにも間抜けが一人いたか」

「違う。確かにみんなを間抜け呼ばわりしたのはよくないが、お前、俺の正体を知ってて、誰にもバラさなかったじゃないか」

「勝手に温情たつぷりの馴れ合いに巻き込むじゃねえよ。バラす価値もねえから、バラさなかったただけだ」

ギルドは、右の人差し指で首輪をつついた。

「俺の弱点だ」

「！」

何を言い出すのかと思えば、自ら弱点を白状してきたではないか。あまりの出来事に、知ってはいたが、驚きを隠せない勇人。

確かに、殺戮人形達に言われたギルドの弱点は、あの首輪だった。あれは、絶対氷結領域を発動する為のアイテム。

ゴム弾での支援射撃で防御を崩したところを、勇人が首輪を外すというのが、言い渡された作戦だった。

あの首輪はブッシュ一つで外せる優れたもので、その優れた機能が裏目に出た形となる。

が、今はそんなことどうだっていい。

何故、自ら弱点を晒した？

「お前らのことだ。あの女の敵討ちで来たんだろ？——死にに」

……ああ、そうだ。

晒したところで、何も変わらないのだ。

「悪いが道は一方通行だ。お前の行く道はこっちじゃなくて——」
ギルドが勝つということに。

瞬間、二十メートル以上離れていたギルドが、勇人の懷に潜り込んできた。

「“そっち”だ——！」

ガードを取るも、ギルドはその隙間を抜いて、勇人の顎に強烈な

アッパーを食らわした。
勇人の体が、宙に舞った。

ラウンド34 お前は最強じゃない

勇人の体が、固いアスファルトの上に叩きつけられる。軽く弾む。痛みにもがく両手で支えて、何とか起き上がる。

そこから立ち上がるまでの間、ギルドが勇人に接近した。接近と同時にまたも、今度は足で勇人を宙に打ち上げた。

その時、ギルドは足に妙な違和感を感じた。

人の感触とは違う、何か軽くて柔らかいものだ。

違和感の正体に気付かされたのは、打ち上げたすぐのこと。

真っ黒な空を塗り潰すような、真っ白な粉が降り注いでいた。

ギルドは視界を腕で塞ぎながらも、その味を舌で確かめた。

……小麦粉だ。

遠くで物音が聞こえた。勇人が落ちてきたのだろう。

しかし、確認するには視界が悪すぎた。

「オイオイ、ネタ見せなら場所を選びな」

が、視界が悪かろうと関係ない。

音があれば、場所は特定できる。

後は——ギルドは手を伸ばした。

この力で——細かい氷の飛礫が氷柱へと変わる。

——殺す……！！

手の平をバネに、思い切りのよい氷柱が放たれる。

小麦粉の煙幕を貫き——カンッ！

「！？」

違う。ギルドは気付いた。

晴れた視界、そこにあったのは、空っぽのドラム缶だった。

孤独に転がるドラム缶。その後ろには、ゴム弾の束が落ちていた。

「……なるほどな」

ギルドは全てを理解した。

落ちたと思った音は、ゴム弾の同時射撃によるもの。そして、空っぽのドラム缶を打って出来た隙を――

ギルドは頭上を見る。

歩道橋がある。

そこには、勇人がいた。

飛ばされた拍子に、あの歩道橋に着地したのだ。

優れた頭脳を持つ殺戮人形の計算能力があつての成功と言えよう。だが、ギルドに見つかつてしまったようでは意味がない。

「愉しくなつてきたじゃねえか!!」

勇人は、ゴムボールを握っていた。

しかも、懲りずにそれを投げてきた。

種はわかつている。小麦粉だ。煙幕にしかない。そして、同じ手は二度通用しない。

ギルドは、ゴムボールから外すように、氷柱のミサイルを勇人にぶち込んでやった。

ゴムボールと氷柱のミサイルがちょうど合わさつた時だ。

遠距離からの支援射撃。

対象は、ゴムボールだ。

ゴムボールが破裂し、中から大量の水がこぼれた。

地上へこぼれる水。氷柱のミサイルはそのまま勇人に突っ込んでいった。

だが、歩道橋手前で、止まった。

「……ッ、おもしろえぞ、コノヤロー」

アスファルトから生える根。氷の根の先には――氷柱のミサイルがあつた。

一つの芸術作品のように、そこには、氷の塔ができていた。絶対氷結領域の『絶対氷結』の力を使ったのだ。

「だと嬉しいんだがな」

が、アンコールに応えられるほど、勇人の体は丈夫にできていな

い。

ラウンド35 揃いも揃って

ギルドは、こう認識する。

数回の攻防、交え。その時、あいつからの攻撃と呼べる攻撃はなかった、と。

結局、あいつの柱は、はったり。しかも、高い自尊心がそれを邪魔している。

あのゴム弾。そして、この正確性。わかつてはいたが、殺戮人形の仕業だ。

数は複数。情報を共有するのだから、恐らく全員いるはず。少なくとも近くはいない。この力の届かない場所——範囲外にいて考えるのが、妥当だろう。

この男は、そいつらに俺への直接攻撃はするなと命じているはず。だから、今までこっちに当ててこない。

性能の無駄遣いってやつだ。

範囲外に駒を置いたまでは合格をやれるが——

それ以外は、話にならない。

「……………」

ギルドは勇人を見据えた。

そして、手のひらに小さな氷柱を立てた。

ギルドはそれを指で弾いて、揺らしてみせた。

「こいつの力は、あらゆる常識を覆す。曲げても折れない氷なんてのも作れる。こんな感じにな」

そして、手のひらで氷柱をブリッジさせてみせた。通常なら有り得ないことだ。

あらゆる常識を覆す。その言葉は確かなようだ。

「さーで、ここで問題だ」

不意に、ギルドはその場でしゃがみ、道路に手を付いた。

「？」

この時点では何をするかわからない。助走をつけてるのか。そのくらいしか思いつかない。

「ここに、穴を空けて」

硬質化した氷柱でアスファルトに穴を空けて――

「曲げて、折れない氷柱を流し込むとする」

ゴゴゴ……と、不気味な地鳴りが――都市の悲鳴が木霊する。

音は満遍なく、全体から。

時折、どこかが突出して大きく聞こえるせいで、勇人は音に惑わされていた。

「――今すぐそこから飛び降りてください！」

小型の通信機器を通じて、勇人に届く感情的な声。

だが、一歩遅かった。

「遅エよ……ノロマ」

ギルドの眩きの後。

下から突き上がる衝撃が。

先程まで歩道橋にいた勇人だが、何故だろう。

今、空に浮いている。

いや、飛ばされたのか。

都市を俯瞰する。

「な、なんだ、こりゃ!？」

街路樹が、ビルが、沢山のビルが、歩道橋が――

“そのままの状態で”浮遊していた。

もう、デタラメだ。

それらの跡を穴埋めするように、氷柱が生えていた。

氷柱は左右に揺れてて、あれがバネになったようだ。

浮遊するそれらを飛び移る、黒い影。

「時間切れだ」

ギルドだ。

ギルドが、勇人の頭上にいた。

「!」

縦に半回して、勇人を蹴り落とす。オーバーヘッドキックの要領で、地に叩きつける。

勇人は垂直に落下。

覆い被さるように、浮遊してたそれらも落下。

ズシン……と鈍重な音と共に、比重を超えたアスファルトが沈下していく。

「所詮は、神下がりか」

——キンツ……！！

全てが、斬れた。

ビルも、街路樹も、歩道橋も。

真つ二つに、斬れた。

「十六夜、第二開放……！」

風が巻き上がる。強烈な風だ。

斬られたそれらが、彼等を避けるように落ちていく。

朦朧する意識の中、勇人は確かに見た。

いちごパンツを。

「……すまん」

ギルドは不敵に笑う。

「なんだなんだ？ 今日は何いも揃って自殺パーティーか？」

彼女を——

「ギルド」ペインウォーカー。神罰商会の掟を破ったあなたを、私達が許さない」

ミナコを。

その背後に立つ、

「みんな……」

仲間達を見て。

奥行きのある道路に、神罰商会の皆がいた。

ラウンド36 痛みの一人歩き（ペインウォーカー）

賑やかな夜だ、と、ギルドは思う。

賑やかな夜になりそうだ、と、他意を込めて、ギルドは思う。
眼前に広がる光景。

この世界に生きる全てを集結させたような光景。

中には、ビルにも相当する大きさの者もいる。

そんな中、やはりギルドが目をつけたのは、ミナコだった。

「やめとけ。お前にトップの資質はねえよ」
振り抜く。

「——ミナコエクスプロージョン!!」

地を走る爆撃。爆撃はギルドを捉える。

ギルドは爆撃に手を掲げ、氷の壁で軽々しく防いだ。

軽々しく防いで、そこから氷を液状に変えて、爆撃を飲み込み、
倍にして返してやった。

ミナコを襲うカウンター。しかし、ミナコは逃げない。

彼女の正面に、巨大な剣が突き刺さる。

ズン……！ と、都市を大きく揺らすそれからは、神々しい白光
が放たれていた。

取っ手へと視線を上げてくと、そこには、大天使の姿が。

西洋の甲冑を身に纏う、別名『エンジェルナイト』だ。

それらエンジェルナイトの大剣が六本、鏡となって塞がる。

体に比例した大きさのそれが並べば、通る攻撃も通らない。
が、それはこちらと同じ。

「殺す気あんのか？」

「殺さない。仲間を傷付ける真似はしない」

パンパン——発砲は後方遠くから。

ギルドは氷の壁は張る。しかし、その脇をゴム弾が通過する。
通過し、先にある大剣の鏡を蹴って、跳弾と化する。

「けっ、くだらねえ」

ギルドは空を拭うように手を振るった。

そこに降りかかる光の槍。その雨。

エンジェルナイトの周囲を飛ぶ『ドラゴンランサー』が、光の槍を投擲したのだ。

それは、殺傷能力のない捕縛用の槍。

殺意がないことが、確定した。

「テメエらのお遊びに付き合ってる暇はねえんだよ！」

ギルドは、光の槍を身体能力だけで躲した。

ワルツのようなステップを踏んで、対処する。

そして、迫り来る跳弾も、跳弾がちょうど重なる角度まで追い込み、そこで氷の壁を作った。

時間差射撃で防御を崩そうとしたのだろうが、無駄だ。

ギルドは、そんじょそこの能力過信野郎とは違う。

「俺にとって、能力の範囲外なんてのは、何のリスクにもならねえんだよ」

ギルドは空を手を掲げた。

「ここは、俺の領域だ」

数分も経たない頃。

ぽつり……と、水が空から落ちてきた。

一粒二粒と——徐々に数を増やしていき、気付けば——

「……雪？」

空は怪しく曇り、そこから雪が降っていた。

雪は途中、溶けて水となり、そして、針となった。

アイスピックくらいの大きさの針。鋭利なそれらが空から降り注ぐ。

「こんなもん、俺の手にかかれば、いつでも簡単に降らせられるんだよ」

辛うじてエンジェルナイトが陣を組んで防いでいるが、数が膨大過ぎて、完全に防ぎ切れてない。

隙間から雪崩れ込むそれらが、皆を襲う。

中にはアイテムも持っていない無防備の者もいる。その者達にも容赦なく襲いかかる。

幾つもの悲鳴が重なり、絶叫と化していた。

ミナコは、十六夜の第二開放で風を起こし、何とか威力を殺しているが。

「ッ……処理が間に合わない!!」

ギルドの前では、全てが無駄だった。

高笑いするギルド。不気味なその笑い声が都市に響き――

勇人を、立ち上がらせた。

ラウンド37　一人はみんなの為に。みんなは一人の為に

氷針の雨の対処に追われるその中で、ミナコは見た。
見て、驚いた。

「！ 勇人さん！ 何をしてるんですか！ 座っててください！」
この状況の中、勇人が立っているのだ。
立ち上がるのも困難な、しかも、彼の場合は骨折箇所が幾つもあるはず。

なのに、立っている。正気の沙汰とは思えない。
まさに、狂気の沙汰だ。

「……ミナコは、何か手伝えますか？」

彼の顔を見て、自然とそんな言葉がこぼれた。

ああ、と、勇人は言う。

そして、作戦を告げた。

あまりに無謀な作戦で、賛成はしづらいものだった。

だが、反対はしてはいけないものだと思った。

反対することは、勇人の心の柱を折ることになると思ったからだ。

「微力ながら、サポートします」

殺戮人形達から通信が入る。心強い言葉だ。

「……わかりました」

ミナコは、ゆっくりと立ち上がった。

全身に氷針を浴びながら、刀を振り上げ――

「勇人さんを信じます」

言葉の後、勢いよく振り切った。

振り切ったその先、勇人がいた。

刀に纏う風が勇人の体に絡まり、最初で最後の最高のスタートを切る。

ゴオオオ、と、ジェット気流のような轟音が、剣の壁を突き破り、
大気の間を突き破る。

ギルドはその眼に、高速で襲い掛かるそいつを見て、力を使おうとした。

手を正面に突き出す動作に移る最中、パン！と、そこに強烈な痛みが走る。

地に転がってきたのは、ゴム弾。

ギルドはそれを踏み潰し、その勢いで周囲に波動を叩き込んだ。冠状に広がる氷の花は、散りゆくように分散し、複数枚の刃となつて、周囲の全てを切り裂いていった。

倒壊したビル、街路樹、折れた歩道橋の残骸。それら全てが木っ端微塵に砕け散っていった。

そして、勇人も――

「！ なっ……！？」

破片が導く軌道の先。

勇人が、いた。

「っ、クソがあああー！」

ギルドは、再び、地面を踏んで波動を起こした。

怒りの分、力は増す。

だが、勇人は止まらなかった。

何故だ。その時、ギルドは異変に気付く。

空に、吸い寄せられている？

見た。

雲。

自らが引き起こした雲。

その上で、鮮やかに旋回を繰り返す影が幾つも。

ドラゴンランサーだ。

波動の軌道を、変えられたのだ。

ドラゴンランサーの繰り返される旋回によって、絶対氷結領域の力が殺されていたのだ。

絶対は絶対でなくなった。

そうして全ての理解が追いついた時、そこには、勇人がいた。勇人が伸ばした手の先で、しっかりと、首輪のスイッチが押されていた。

スツ、という空気の抜けた音と共に、首輪は、握力から解放されて、空に流されていった。

外れると同時に、氷針は嘘のようにピシヤリと止み、狂いに狂った天候に僅かな希望の兆しが見られ。

隙間から差し込む天の輝きは、地上に立つ二人の男達を照らしていた。

奇しくもそれは、どちらか一方ではなく。

二人一緒に、勝利の花を与えているようだった。

いや――

この戦いに、最初から勝つも負けるもなかったのだ。

「すごいだろ。これが、ギルドの仲間なんだよ」

神は、最初からそれを知っていたのだ。

ラウンド38 ミナコラブロマンス

体中のありとあらゆる細胞が破壊されそうな、途轍もない刺激臭に叩き起こされた勇人。

もはや、それは警告。このままじゃ死ぬぞという体からの警告。こうして勇人を死に追い込んだのは、……恐らく、いや、絶対にそうだ。

ミナコだ。

*

全力で換気をした部屋の床には、歪な形状に変化した鍋の残骸が転がっていた。

しかも、一つや二つじゃなく、かなりの数である。

世にも恐ろしい光景だが、換気する前までは、ここに毒ガスじみた煙が充満していて、勇人は一瞬、実は死んだのかと思ってた。

幸いなことに、死はおるか無傷でいられたので良かったのだが。

ミナコの後ろから、鍋を覗く。……惨状は言うまい。

「あれ、勇人さん。起きてたんですか？」

「ああ……。な、何を作ってるんだ？」

「ミナコ汁ですよ」

「ミナコ汁？」

「これを飲めば、ミナコみたいに元気いっぱいになるんです」

「へ、へえ……そうか」

これ以上、ここにいたら飲まされる気がした。

勇人はさりげなく、その場から離れようとする。

扉までの距離は約五メートル。行けるか――？

「そうだ。勇人さん、せっかくだから飲んでくださいよ」
お声がかかる。

残り一メートル地点で、勇人、無念。

「遠慮しなくていいですよ」

いや、まだだ。

まだ、振り切れれば何とか。

「いや、俺はまだ死……」

何とか……ならない。

勇人は見た。

ミナコの目の下、そこにできた隈。

鍋の煙で出来たものではなく、泣き続けていたからできたもの。

「ミナコは怒ってます。勇人さんだけ勝手に行つて——」

「……すまん」

またサテラのように怪我人を出してしまつたら——

「本当に死んでしまつたら、どうもできないんですよ！」

それが、真理だ。

ミナコが泣いている。こんなことになるなんて。こんなことをさせてしまうなんて。勇人は自分を殴りたくなつた。

「そうだな」

とりあえず自分を殴る手は引つ込めて、今は目の前の彼女の涙を拭うことにしよう。

「……腹、痛くなかつたか？」

*

アダムの私室に、ギルドは呼ばれていた。

ギルドは、この上なくアダムのことが嫌いだ。商会内でトップと
いいほどに。

だが、それはアダムも同じことで。

「まあ、組織を束ねる者としては、お前みたいな厄介者つてのは非常に邪魔つてわけだ」

タバコをふかしながら、アダムは言う。

「けっ、だったらとつとと排除しろよ」

ギルドは至って反抗的。

が、そんな彼の態度を変えさせる一言が、アダムの口からこぼれる。

「——“裏十字会”」

「！」

「近々行われるとされている、全組織参加の闘技トーナメントに、あいつらが出るようだ」

アダムは、ギルドを見る。

「何度も言うが、組織を束ねる者としては、お前みたいな厄介者つてのは非常に邪魔だ。だから、お前が除籍を希望するなら、俺は喜んで——」

「——残ってやるよ」

ギルドは感情剥き出しに口にする。

「指図は、受けねえ」

*

大食堂。

素顔を明かした勇人の周りには、沢山の人だかりができていた。どうやら異世界（日本）から来たことに興味を持っているようだ。勇人は照れながらも、こういった些細なことで繋がりを持てたことが、とても嬉しく思えた。

「勇人さん！ 早く食べないと、ミナコ汁が冷めてしまいますよ！」
成り行きで食べることになった勇人だが、その劇物フォルムに食欲は増すどころか地獄の底までダウンしている。

「いや、冷めてからの方が……」

ざっ、と、空気が変わった。

人だかりが二手に分かれていく。

その先に、ギルドがいた。

皆、やはり今すぐには打ち解けられないらしい。

「おお、ギルド。体の調子はどうだ？」

ギルドは無視。

が、手元にあった鍋を手に取り、豪快に口に流し込んだ。空っぽにして鍋を乱暴に返した。

ミナコは仰天しながら、その眼差しを勇人に向けた。何かを乞うような目で、じーと見つめる。

「いいんですか？」

「何がだ？」

「……ならいいです」

ミナコは何かを諦めた。

ギルドはミナコ汁だけを食べて、その場から姿を消した。

「大勢で飯を食ったほうがうまいのにな」

ギルドの背中を見ながら、勇人は呟く。

「きっと大丈夫ですよ」

ギルドは姿を消した。

消したその後、一人、道に迷った。

サテラが眠るその部屋に、一人。

「ギルド君には、これからがあるんですから」

ラウンド39〜DOD（デリート・オブ・デステイニー）〜

ミナコの私室にて。

「DOD？」

聞き慣れない言葉に、勇人は首を傾げた。

ガラステーブル一枚挟んだ先に座るミナコが、その言葉の意味を教えてくれた。

「デリート・オブ・デステイニーですよ！」

「いや、そんな知ってて当然みたいな言い方されても困るんだが」
天川勇人は日本人だ。

この世界（魔界）のことは、ほとんど知らない。

ほとんど、というのは、勇人が魔界に来て一ヶ月が経過しているため、多少なりと知識はついてるからである。

とは言え、このDODについては初めて耳にする。

「DODは、全組織参加のトーナメント大会のことです」

「……嫌な大会名だな」

「神魔聖杯の円滑化が目的なので仕方ないです」

「——で、その大会がどうしたんだ？」

ミナコはガラステーブルに前乗りし、キスできそうな距離まで、勇人に近づいた。

そして、強く意気込んで言う。

「参加するんですよ！」

「そうか」

勇人は即答。

「じゃあ、頑張ってくれ」

ビシッ、と、ミナコチョップが勇人の脳天を襲う。

「頑張ってくれじゃなくて、勇人さんも参加するんですよ！ー！」

「そんな危険な大会、俺みたいな一般人が参加したら、すぐに負けるじゃないか」

「大丈夫ですよー。勇人さんはこの前のギルド君との戦いで、レベル10くらいにはなりましたから」

「10!?!」

ミナコの根拠のない発言はさておき、テーブルに一枚の紙を置いた。

トーナメント表だ。

AブロックとBブロックの二つのグループに分かれ、最終的に二手の最強がぶつかるようだ。

「というか、既にエントリーされてるし……」

そこにはしっかりと、神罰商会の名が書かれていた。

「神魔聖杯に参加している、または支援している組織は、戦闘能力的に大会出場できないレベルでも、強制参加が義務ですのぞ」

「ますます出る気がなくなるな」

「まあ、そう言わないでください。うちはラッキーですよ。魔界最強と謳われる組織『裏十字会』とも先じゃないと合わないですし――

――」

何より、と、ミナコは言う。

「この初戦の相手『三ツ喪神』は無名、つまり実績ゼロです!」

「わざと隠してるだけなんじゃないか?」

「安易に神なんて名前を付けてるあたり、その可能性は限りなくゼロですね」

ウインクつきでミナコは言う。

「一人一回参加すれば、後は参加なくていいので、心配しなくて大丈夫ですよ」

やたら気分のいいミナコのせいで、恐ろしく心配だった勇人だった。

ラウンド40 邪神への懸念

夜。

皆が寝静まる中、勇人はエフを一人、廊下に呼んだ。

エフはアンドロイド。つまりは機械。こんな時間でも起きている。

「——ということなんだが」

扉一枚挟んだ先で、ミナコが寝息を立てる中、勇人はDODの話をしていた。

「ミナコは俺でも大丈夫って言うてるが、一応は戦闘ありきの大会なんだから、多少なりと経験は積んでおいたほうがいいと思うんだ」
「それで、必殺技ですか？」

「必殺技は極論だ。何かカウンターみたいなものがあれば、力のない俺でも相手できると思うんだが、どうだろう？」

「勇人は、必要ならば、神の力を使うべきかと」

ちなみに、勇人本人に呼び捨てでいいと言われたので、エフを含む全殺戮人形のプログラミングを書き換えられてある。

「確かにそっちの方がいいし、俺も皆の為なら惜しまないんだが……」

勇人には、悩みがあった。

「この神の力って、必ずいい方に転ぶわけじゃないみたいだしな」

天神と邪神。

勇人は内に二つの神を秘めている。

天神になる方法は分かっているが、邪神になる方法は分かっている。ない。

すなわち、いつ、どのタイミングで邪神になるか、なってしまうかわからないのだ。

勇人は、こう思う。

「天神が光だとしたら、邪神は闇。光の正反対の力を持つてると思うんだ」

「方法がわからない以上、使う使わない以前の問題かと思いますが」
「まあ、そうなんだが、神の力に頼り過ぎると罰が当たりそうだろうか？」

「神に罰を当てるほうが罰当たりだと思いますが……わかりました」
エフは額にかかる翡翠色の前髪を上げた。

不意に、勇人に顔を近づいてきた。

「な、なんだ!？」

離れそうになる勇人を、髪を上げてない手で引き寄せ、その額を、
勇人の額にぶつけた。

勇人は思春期全開の勘違いをし、目を瞑っていた。

真っ暗だ。

真っ暗なそこに、ある情報が流れ込んできた。

額が離れたちょうどその時、勇人は閉じてた目を開けた。

自らの額に触れ、微かな温もりを感じる。何もない。

「大丈夫です。情報を送っておきました。話は私達の方からつけて
おきますので、どうぞ、頑張ってきてください」

ラウンド41 ラブロマンズは止まらない？

早朝。

「えっー、任務行けないんですかー？」

可愛いらしいピンクのパジャマ姿のミナコが、玄関前で勇人と揉めていた。

「ああ、急用ができたんだ」

「うう、せっかくミナコパイを作ろうとしたのに」

「それは、帰ってきてからまた作ってくれ。一ヶ月ほどいなくなるから」

「ええ！？ 一ヶ月ですか！？」

一気に目が覚めたミナコ。

「一ヶ月っていったら、DODがもうすぐじゃないですか！！」

「大丈夫。それまでには戻るから」

勇人は背後、ガラス越しで低空飛行を続けるドラゴンランサーがいた。

槍の先端でツンツンと二回、窓をつつく。

「そろそろ時間だ。じゃあ、一ヶ月後にまた」

ミナコの気など知らず、勇人はスタスタと行動に移していた。

あまりに素っ気ない彼の対応に、ミナコは頬を膨らませていた。

「いいんですかー？ ミナコ、ギルド君と一緒に任務行っちゃいますよー？」

「おお、そうするといい」

「ミナコ汁も作ってあげないですよー」

「……それは、一ヶ月後も遠慮しておく」

窓を開け、ドラゴンランサーの搭乗者に手を貸してもらい、勇人はドラゴンの背中に乗せてもらった。

「まあ、そういうことだから、よろしく頼む」

バサバサと大気を切る翼音から、ドラゴンは、空高く飛翔する。

「あつ、勇人さん！」

窓から首を出すミナコ。しかしその先に、勇人の乗ったドラゴンの姿はなかった。

「むっー、こうなったら、本当にギルド君と浮気（？）をしちゃいますよ！」

との意気込みだが、数時間後、ギルドに特攻を仕掛けたミナコはもれなく玉碎された。

*

ドラゴンの背中に乗る勇人。

服装は相変わらずの制服姿。荷物はバッグを一つのみ。

中身は、酔い止めの薬とペットボトルの水が一本、それと、エフに渡された謎の包み。

薄い紙のようなもので包まれたその中身は、どうやら粉のようだ。紐で頑丈に結ばれているので開けられないが、少なくとも閉めた状態からは臭いはしない。つまりは無臭だ。

「こんなのが本当に役立つのか？」

疑問に思いながらも、二時間かけてようやく目的地に着く。

岩壁地帯だ。

大きさはまちまち。人くらいの小ささのものもあれば、ビルのように突出したものもある。

通じて言えることは、どれも色合いが薄いということ。まるで人肌のようなだ。

その色合いから、かなり乾燥していることが窺える。

重量のあるドラゴンが着地するのは難しいようで、岩壁地帯手前の草原で勇人を下ろした。

草が冷たくて気持ちいいのか、ドラゴンは翼を休め、しばし休息していた。

「送ってくれてありがとう」

勇人はドラゴンの頭を撫でてあげ、ゴツゴツの肌触りを手に握り締め、目的地――岩壁地帯へと足を進めた。

ラウンド42ニャンと登場!??

自力で歩いて、岩壁地帯に入った勇人。

ふと、激しく照りつける日差しを遮ろうと手を上げた時だった。

岩壁から岩壁へ。縫うように飛び移る影が見えた。

あまりの速さに、それが人かどうかさえわからない。

しかし、やがて飛び移るにつれて、その細身のシルエットに人はいない物が見えた。

尻尾だ。

よくよく見れば、頭にも尖った耳らしきものが見える。

狼か。はたまた――

「人は私をこう呼ぶ――」

猫か。

「――“ニャン”と」

「でしょうね」

猫だ。

目の前に着地してきたのは、猫と人間のハーフの娘だった。

スラッとしたボディライン。長身にフィットする黒髪。白い肌が

露出された、肩口のない情熱的な赤い中華ドレス。

靴はなく、素足のまま。

切れ長のその瞳に似合わない、可愛いらしいモノを頭とお尻に持っている。

「あいつらから話は聞いている。私に稽古をつけてほしいんだろ？」

「はい」

「悪いが、私は弟子を取らん主義だ」

「ええ!? 話はついていると聞いてますが……」

「そちらの事情は知らん。帰ってくれ」

まだ会って一分も経たずに、夢が打ち砕かれた。

しかし、今さら引き下がるわけにもいかない。

「そこを何とかお願いします」
頭を下げた。

「駄目だ」

土下座もした。

無理だった。

諦めかけたその時、勇人はふと思い出す。

「あ、これを」

エフに渡された包みである。

勇人は立ち上がって、せめてこれぐらいは渡しておこうと、ニヤンに渡した。

最初は嫌々そうに見てたニヤンだったが、包みを開けた途端、表情が一変。

「お、お前……！ これは、一体……！？」

実のところ、勇人は中身を知らない。

で、中を覗かせてもらったのだが、それでもわからない。
ただ、とりあえず事前予想の粉というのは当たっていた。

「何ですかね。これ」

「マタタビだ！ お前、マタタビを知らないのか！？」

マタタビ……猫が好むとされる実のこと。

どうやら、粉末状にされているようだ。

ニヤンはこの上ない喜び方をしているが、勇人にはさっぱりだった。

「まあ……とりあえず、別に知り合いとかいませんか？ 弟子受付中のとこで」

ニヤンはマタタビの粉を少量、鼻にこすりつけながら、無邪気な笑顔を浮かべている。とても機嫌がいいみたいだ。

「気に入った！ お前を弟子に取る！」

ビシッと指差すニヤン。

「ええ！？ あっ……よろしくお願いします！」

気に入ったのはマタタビだろう——と、思った勇人だったが、修

行の為、みんなの為、あえて口を閉ざすことにした。

ラウンド43〜三種の神戯

気を取り直して、ニヤンは勇人の要望通り、カウンター技を教えることにした。

場所は変わらず。まずはニヤン自らが手本を見せることに。

「今から見せるのは『三種の神戯^{じんぎ}』という、カウンターの連携技だ」
勇人との距離を一メートルくらい空ける。

右の人差し指の腹をクイツと上げる。

「いつでもいい。好きな時に攻撃してこい」

ニヤンは身構えることなく、素の状態であつていた。

隙のない構え——とは思えない。

「えっ、いつでもって……」

人を殴る。まして異性を殴るなんてこと、そう易々とできることではない。

躊躇う勇人に、ニヤンが。

「他にアテがあるのか？」

その通りだ。言われて勇人は気付く。

いろんなものを置き去りにして、ここにきたのだ。

強くなる為に——

「はあ……」

今から弱気で、どうする。

「……ふう」

大きく、深呼吸を一回。

「——行きます」

勇人は前へ踏み出した。

地面を蹴飛ばすように、前へ。

同時に拳を構えた。

射程圏内に入る。引っ込めてた拳を突き出す。ぶつける。

「神木突き——」

突き出された拳に合わせて、ニヤンが拳を出す。まるで後出しジャンケンのように。

双方の拳が合致した瞬間、勇人は突風を浴びた気がした。現に体は浮いていて、ぶつかっただけの拳は離れ、気が付けば、足は地から離れていた。

「神落——」

ニヤンは浮遊する勇人の体を引きずり落とすように、垂れ下がった右腕をグイッと下に落とした。

まるで最初からそこに腕があったかのような、鮮やかな連携だった。

勇人は地に叩きつけられ、その弾みで僅かに体が浮く。

叩きつけたままの体勢。ニヤンは低い位置から勇人の左腕を掴み、自身も前転し、勇人の体を一歩先へ叩き付ける……！

「——神狩り」

攻撃を仕掛けて三秒足らず。

勇人は空を仰いでいた。

瞬く間の出来事だった。

背中 of 痛みを忘れるくらいの、興奮と感動が胸の奥を熱くさせる。

「これが——」

ニヤンは立ち上がる。

倒れる勇人に、告げる。

「三種の神戯。お前が覚える技だ」

ラウンド44 神木突きハードル

ニヤンは拳を真つ直ぐ前に突き出した。

「まずは、神木突きだ」

「押忍！」

勇人も見様見真似で、拳を真つ直ぐ前に突き出してみる。

「神木突きは、三種の神戯の始まり。ここで躓いたら、後は続かない」

ニヤンは突き出される勇人の拳に触れた。

「人が攻撃する時、体の中では力の分配が行われている」

「力の分配ですか？」

「そう。拳で殴るだけでも、足や腹に力を入れている。威力が高まるからだ」

触れた拳を軽く叩きながら。

「だけど、最終的に力は一点に集中する。殴る場合なら、この拳になるほど、と、勇人。」

「神木突きは、その一点の力をカウンターする技だ」

「そんなこと、力がない俺でも可能なんですか？」

「力のないお前だからこそ可能と言っている。——神木突きは、両極端の力をぶつけて、反発させているだけに過ぎない」

ニヤンは拳を作り、勇人の拳に軽くぶつけた。

「互角の力なら相殺にしかないが、魔界一最弱と言っていいお前の力なら、どんな相手でも反発する。つまり、カウンターは成功する」

「おお！ 凄い技だ！」

「浮かれるな。神木突きは、タイミングを最も重要とする技。さつきも言ったが、力が一点に集まる最終段階にこそ使える技で、それ以外で使っても意味はなく、むしろ、こちらが不利になる」

便利な技であると同時に、危険な技であるとも認識させられた勇

人。イチかバチか。まさに両刃の剣だ。

ニヤンは更にもう一つ、欠点を教えた。

「あるいは、意図的に相手に力の加減をされれば、逆にカウンターされることになる」

「相手も同じ考えをしてたらってことですよね」

「そういうこと。だから、相手を本気にさせる話術も必要だ。もちろん、それも冷静な相手だったら通じない」

「結構、思ってたより、飛び越えなきゃならないハードルが多いですね」

「戦いに必勝法なんて近道はない。積み重ねた先の先に、ようやく勝利は見つかる」

——だが、大丈夫だ。と、ニヤンは言う。

「ここさえ飛び越えれば、三種の神戯はお前のものとなる」

ラウンド45〜ニヤニヤンと登場！？〜

威勢のよい掛け声は、夜遅くまで続いた。

辺りがぼんやりとしか見えなくなってきた頃、姿を消していたニヤンが帰ってきた。

岩壁と岩壁との間に吊した、歪な形状の丸太がある。

ゴムのような素材で吊されたそれは、傷んだ林檎のように表面の凹凸が激しい。

勇人はこの奇妙な形をした丸太を、真っ直ぐ飛ばすよう練習している。

真っ直ぐ飛ばせば、岩壁との隙間を通る。

少しでも横にズレれば、丸太はこちらに返ってくる。

そうして軌道が変わった丸太を、隙間に狙って打つ。

瞬時に力の集中点を見極める練習である。

いくら回数を重ねようが、軌道が変わる以上、単純化はできない。まさに生き物。動く標的を相手にすることで、より実戦に近い感覚を持てる。

——とは言え、もうこんな時間だ。

「飯の時間だ。こっちにこい」

勇人は片手で丸太を止めた。

「えっ、ああ、もうそんな時間ですか」

ニヤンは勇人を連れて、十分ほど、草原の中を歩いた。

生い茂った草村の先に、ログハウスを見つける。どうやらここがニヤンの家らしい。

てつきり野宿でもしてるんじゃないかと思っていた勇人にとって、これは意外だった。

そんな勇人の思いも知らず、ニヤンは家の中へ。

扉を開けてすぐ、明るい照明と共に異様な臭いが勇人を刺激した。鼻を摘みたくなくなるような、目の奥が刺激されそうな、激烈な臭い

だ。

原因は十中八九、机に並べられたあの料理だろう。

ニャンはこの臭いに何の反応もしていない。それどころかミントでも嗅ぐみたいな清涼感たつぷりの仕草をしている。

そうした時、勇人は気づいた。

ニャンは猫（本人は否定してるが）。

つまり、料理の味も好みも、全て猫仕様になっている。

「通りで」

なんて言っていていられるのも今のうち。

これから小一時間、いや、一ヶ月間、この猫料理を食べることになるのだから。

*

意外にいけなかった。

近くの温泉で一休みする勇人。両手で白濁湯を掬い、顔を洗う。

胃の中に鉛が詰め込まれている気分だ。酷く重い。

「ふう……、修行以上にハードだった」

「——食べることも修行だ」

不意に声が届き、後ろを振り返る。

カポーン——……

「なっ……」

目が合う。そこには、一糸纏わぬ姿のニャンがいた。つまりは裸。真っ裸だ。

「ちよちよちよちよっ——ええっ!？」

背を向ける。見てしまった。湯気が甘くて完全に見てしまった。

「風呂、入るんですか!？」

「当たり前だ」

そこは猫じゃないのか! と、つつこむ余裕は勇人になかった。

ラウンド46 神魔戦争の傷痕

まじまじと女性の裸を見てしまった勇人は、その夜、寝付くことができなかった。

隣にその張本人が寝ているのだから余計にだ。

薄暗いその部屋の天井は、ぼんやりとしか見えなかった。

「眠れないのか？」

不意に隣から声が届く。

「師匠」

「なんだ？」

「明日なんですけど、修行はお昼からでもいいですか？」

「お前がそれでいいなら構わないが、何か用があるのか？」

勇人は、胸中に秘めた迷いを打ち明けた。

「この近辺で取引してこようと思うんです。自分勝手に始めた修行なんで、せめてそれぐらいは」

「そうするのは構わないが、この近くで取引できる会社なんてないぞ」

「既に魔界商会と契約済みってことですか？」

「それもあるが——ニャンは理由を述べた。」

「この辺りは、地盤が緩い。今すぐにでも崩れてもおかしくないほどにな」

なるほど。と、勇人。

「元々は、オリハルコン超強化型金属の採掘場所だったんだぞ」

「そうなんですか」

「まあ、それも昔の話。神魔戦争の最終決戦によるダメージが、今もこうして残っているんだ」

ニャンは悲しそうに、そう呟いた。

「むやみやたらに歩いていると、地盤沈下に巻き込まれるぞ」

一変して茶化すニャンに、勇人は不安と安心を同時に得る。

「それに——そんな保険をかけなくても、結果を見せれば、誰だつて納得する」

「保険だなんてそんなこと——」

「大丈夫だ。修行の成果は必ず出る。恩情で言ってるわけじゃないぞ」

ニャンには確証があつた。

勇人本人は気付いていないようだが。

「お前なら、私でさえ辿り着けなかった“境地”に辿り着ける」

絶対にだ——ニャンは念を押す。

「さあ、明日も早いから、もう寝るぞ。休むことも修行の一つだ」

「……押忍！」

ニャンの言葉を受け、勇人は自分を信じた。

ここで信じれなかったら、修行は続けれなかっただろう。

一ヶ月の月日は、こうして流れていった。

ラウンド47 DOD開幕！！

DOD開幕当日。

その日、魔界の地上には一様に人がいなくなる。

DODが開かれる地下闘技場へ向かっているからだ。

収容人数五千万の大型地下施設。ここでDODは行われる。

場内はDODの他に様々なイベントが行われており、メインステージがDODとなる。

中央に位置する五十メートル四方の石盤のメインステージの周りには、観客席がある。

左右の通路は、グループ別の入場口だ。

その通路の先には控え室があり、各チームごとに用意されており、魔界でも名高い神罰商会の待遇はかなりいい。

時空間移動——細かい説明は省くとして、神罰商会は本拠地から直通で会場入りできるのだ。

なので、今、ミナコをはじめとした神罰商会の皆は、普段通り、神罰商会本部であるアークス聖十字学園にいる。

空間モニターが設置される広場には、観戦している者達もいる。その中にミナコもいた。

マテリアルやスピリッツの娘達と共に観戦している。

最も——その心は、未だに修行から帰ってこない勇人にあるのだが。

「まだ出番は先だから大丈夫だよ」

マテリアルの言葉に、浮遊するスピリッツの娘達も頷いている。

「最悪、ユートは後に出せばいいじゃん」

スピリッツはスピリッツ同士でじゃれ合いながら、言った。

「駄目なんです！」

ミナコははっきりと断言して、マテリアルからスピリッツまで総勢十五人を順に鞭打つように指差していった。

「みんなは甘いですよ！ 勇人さんはとっても弱いのです！ ミナコは知ってるんです！」

そこその胸を主張しながら、ミナコは言った。
そんな彼女に送られる眼差しは賛美ではなく、いやらしい半笑いの眼差しだった。

「！ 何ですか！ 揃いも揃って！」

「また勇人さんだなーって」

他意を込めて、マテリアルが言う。

「ど、どういう……」

「ミナコはコートが大好きなんだよねー！」

スピリッツが仲間同士で輪になってじゃれ合いながら、言った。

「ななな！ そんなわけないじゃないですか！」

むしろ逆です、と、ミナコは言う。

「勇人さんがミナコのことを好きなんです！」

そんな素振り一切ないわけだが。

「あんま上から見てると飽きられちゃうよー」

お姉さん系のマテリアルが、大人の意見を述べる。

「ええっ……そうなんですか」

ミナコが急にオロオロしだした。

「——いや、大丈夫です！」

しかし、ミナコには飽きられない自信があった。

彼女をそこまで駆り立てるものとは——

「ミナコにはミナコ汁があるので！」

世にも恐ろしい自信である。

ミナコ汁の味を知る皆が心の中で、駄目かもしれない、と思ったのは言うまでもない。

ラウンド48 迷い神の帰還

大会は着々と進んでいき、いよいよ神罰商会の初戦となった。

「神罰商会様、そろそろ出番ですので、出場者の移動をお願いします」

タキシード姿の審判員が一人、神罰商会に現れた。出場者を呼びに来たのだ。

空間モニターのある広場。ミナコの気持ちも知らずに、勇人は相変わらずいない。

つまり、まだ修行先から帰ってきていない。

ミナコは拳を握り締めながら、近寄り難いオーラを発している。とはいっても、DOD前には帰ってくると約束したのだから、これは、完全なる裏切り行為。

「もう知りません。勇人さんは裏十字会にでも当ててやるのです」

ミナコは空間モニターを見た。

勇人がいた。

——とは言っても、あれは、偽物の勇人。正確には、アルトウクス神。黒い仮面と黒いマントに身に纏う偽物のアルトウクス神だ。対戦相手である『三ツ喪神』は、かつての勇人の格好に扮した組織だった。

組織と言えば、大勢いるイメージがあるが、三ツ喪神はまだ仲間が一人もおらず、単独。名だけの組織だった。

こんなラッキーな相手は、もう出てこないだろうに。

「続きまして——」

大会は着々と進んでいる。

「あの、そろそろ」

ミナコが一步、輪の中から前に出る。

「ミナコが出ます」

決意を固めたその時だ。

「勇人が来た！」

十色十声が響いた。

ミナコは威嚇するような目を出入り口に向けた。

「……いないじゃないですか！」

違う違う。と、皆が言い、一点、空間モニターを指差す。

「――」

正確には、そこに映し出される会場だが。

隙間なく埋まる観客席の中を、ぺこぺこ頭を下げながら下りてくる、勇人がそこにはいた。

「こちらが別会場にいること知らないんだよ！」

ミナコは怒りを通り越して、呆れていた。

頭を抱え込む。まあ、ちゃんと説明しなかったこちらにも落ち度はある。

「だけど、こんなギリギリに来る人が……」

ミナコは青黒い渦の向こう——時空間ゲートの中へと走っていった。

「あつ、ちよつと……！」

審判員も慌てて後を追った。

ラウンド49へ成長しました

勇人が取り押さえられていた。

メインステージ手前で、三名の警備員に。

観客席からメインステージに乱入しようとした熱狂的なファンとして見られたらしい。

勇人は抵抗しつつ事情を説明しているのだが、参加資格である証明書がない為、話を聞いてもらえない。

このまま抵抗し続ければ、退場も有り得る。

「神罰商会の者です」

そんな窮地に追い込まれる中、ミナコが来た。

自分の証明書と、勇人の証明書を提示しながら。

証明もされれば、そこからは神罰商会として無礼のないよう接さなければならぬ。

「し、失礼しました」

警備員達が一斉に謝罪したその時、勇人とミナコの姿はなかった。

*

入場口の通路に、勇人とミナコの二人はいた。

「おお、久しぶり」

勇人は素っ気なかった。

彼らしいと言えば、彼らしいのだが……。

ミナコはイマイチ納得のいってない様子だ。

とは言え、もうすぐ試合が始まる。

ここでガミガミ言っても仕方ない。

「……信じていいんですね？」

そっぽを向いたまま、ミナコは言う。

「おう」

返ってきた言葉は、単純だけど、一番安心できる言葉だった。

「——ならいいです」

ミナコは勇人の顔を見た。

修行から帰ってきた彼の顔を見て、不覚にもカッコいいと思ってしまった。

それほどまでに、見違える顔をしていた。

まともに見れない。やっぱりそっぽを向く。

今度は怒っているからじゃなくて——恥ずかしいから。

「それはそうと、何か食う物持っていないか？」

「食事でしたら戻ればありますけど、もうすぐ試合始まりますよ」

「そうだな。じゃあ、ミナコ汁を持っていないか？」

「ありますけど……勇人さん、ミナコ汁嫌いじゃないですか」

「この一ヶ月、まともに飯を食べてないんだ。だから、何でもいいから頼む」

「な、何でもいい……！？」

聞き捨てならない言葉だ。

ミナコはそんな軽い女じゃないありません！ と、抗議しようとしたが、ふと、お姉さん系マテリアルの言葉を思い出した。

あんま上から見ると飽きられる、と。

「……待っててください」

同じ目線で付き合おう。ミナコは新たに目標を作った。

勇人に飽きられたくないから。真意を言うなら、フられたくないから。

「何か変わったな、ミナコ」

彼女の背中を見ながら、勇人は静かに呟いた。

「——続いての試合は、出ました！ 神罰商会vs三ツ喪神です！」

ラウンド50〰天冥境地〰

勇人は、コップ一杯のミナコ汁を一気飲みした。
空っぽになったコップを、ミナコに返す。

持ってきてくれたミナコに感謝の意を告げるも、白熱する会場の
歓声によって打ち消される。

ただ、ほんの一瞬――

「行ってくる」

まるでそこに二人だけしかいなかったような、そんな気さえする
ほどに、その言葉が通ったのだ。

勇人がメインステージへの階段を上がっていく。
その背中を、ミナコはじっと見つめていた。
空っぽのコップを懸命に抱き締めながら。

*

実況からの説明が入る。

「Aブロック！ 神罰商会代表、天川勇人！」

会場のボルテージが上がる。

「Bブロック！ 三ツ喪神代表、アルトウクス〰レプリカ」
対照的にブーイングが流れる会場。

神聖なる大会にふざけた名前で出場するなど、そういう思いが一
致した結果だ。

ブーイングを受けるアルトウクス〰レプリカ……三ツ喪神だが、
さすがに出場しただけあって、何一つ動じていない。

「試合は戦意不能と判断されるまで続きます」

ルールは把握した勇人。勝つまで戦い続けるとは、来る前から決
めていたことだ。

「それでは、一本勝負――始め！」

先攻は、三ツ喪神。

三十メートル以上ある距離を一気に詰め寄ってきた。

黒いマントを激しく揺れながら、素顔を隠すその仮面が接近する。勇人は、何も構えていなかった。

メインステージの傍で見守るミナコの表情は、やはり不安そうだ。

「——大丈夫だよ」

そんな不安そうに見守るミナコに声を掛けてきた者がいた。

懐かしいその声。まさかと思いながら、ミナコは後ろを振り返った。

「ニヤン！？ どうしてここに！？」

勇人の師である、ニヤンだ。

「弟子の初陣をな」

「弟子？」

ニヤンの視線は会場に向けられている。

修行から帰ってきた勇人。修行——

「まさか、ニヤンが勇人さんを……！？」

迫り来る三ツ喪神。助走で勢いをつけた拳を突き出す。

勇人は直前まで追い込む。

「まっ、私が教える必要はなかったんだがな」

「どういうこと？」

そして、己の拳で——突く……！！

「あいつは神の力を持つ。もちろんその力を自在には使えないが、力に使われてはいる。だから、自然と神の力に適した体になったんだよ」

神木突き。

神落。

神狩り。

「——“天冥境地”」
てんめいきょうち

三種の神戯が三ツ喪神を襲う。

メインステージの石盤に、体が叩きつけられる。

試合開始十秒。

勇人が一人、メインステージに立っていた。

「今のあいつは、真正正銘——最も神に近い人間だ」

ラウンド51 完全消滅領域からこんにちは

勇人の無事の帰還と初勝利を祝し、活気付くその現場に、ある男の姿がなかった。

勇人もその男がいないことに気付いており、今にも探しに行きたいのだが、この状況を抜け出すのは至難の技だ。

*

意中の男は、会場の通路にいた。

白い穢れのない廊下。そこに立つ真っ赤な自販機。その前に、ギルド・ペインウォーカーはいた。

神罰商会は、彼には些か窮屈なのだ。

どの道、途中は一人で片付けるつもりだったから、移動の手間が省けるってものだ。

「よう、久しぶりだな」

声は突然。

——真横から。

自販機の前にはギルドしかいなかった。

が、そこには、いるはずのない男が一人、立っていた。

ブラックスーツに身を包んだ、白髪の男。あちこちが針のように尖った髪型だ。

口周りには無精髭。メガネとの一式がよく似合う。何ともヤニ臭い男だ。

「……んだア？ その格好。笑い誘ってんのか？」

「だとすれば、そりゃ、上の奴らの仕業だ」

ギルドは動じない。

この男の持つ力——完全消滅領域がそうさせたのを、誰よりも知っているから。

「というより、お前こそ、随分と首が寂しいじゃねえか」

「今の俺に力はねえ」

絶対氷結領域に必要な首輪は、今、修理に出しており、力と共になく状態だ。

「……まっ、どうでもいいけどな」

男は去っていく。

「どの道、お前は俺を殺せねえから」

ギルドもまた、去っていく。

「精々、短い余生でも満喫しろ」

互いに別々の道を、歩いていく。

「——クソ兄貴」

男の名は、サバト＝ペインウォーカー。

ギルドと同じ聖人の生き残りであり、ギルドの兄である。

ラウンド52 失った力と得た力

ギルドが帰ってきた。

神罰商会の待合室。アークス聖十字学園一階の広場。

ギルドの帰りに、その場で試合を観戦してた者達が騒ぎ出す。

「ギルド君、どこ言ってたんですか？」

何気なくミナコが尋ねるが、ギルドは当然のように無視。

「なっー！ 何で無視するんですかー！？」

それすらも無視したギルドは、空間モニターに映し出される対戦表を見た。

神罰商会は二回戦まで上がっている。

今現在、三回戦を戦っており、苦戦している様子もないので、順調にいけば、まあ、勝つだろう。

いずれにせよ、サバト属する裏十字会と当たるのは、第十三回戦目だ。

それまで勝ち続けなければ、サバトとは戦うことすらできない。

今はまだ戦いにも余裕があるが、後半になれば厳しくなる。

負ける可能性だって十分にある。

そもそも、神罰商会は個々で突出しているから強く見られているだけで、組織全体で見れば、そう強くはない。平均より少し上といったところ。

ラッキーパンチは、そう何度も続かない。

「――勝者、神罰商会……」

戦いが終わった。

「いい試合だったな。なっ、ギルド」

ギルドはその場に背を向け、時空間の扉へ向かって歩いていた。

「こっから先は俺一人でやる」

「あんた、アイテムないじゃん」

お姉さん系のマテリアルの指摘も、ギルドは無視した。

見えているものは、一人しかないようだ。

*

神罰商会第四回戦。

メインステージ上には、宣言通り、ギルドがいた。

正面には、顔面を布で巻いた男がいる。

雨合羽のようなこじんまりとした格好しており、その手には、メートル近い棒を握っていた。

「あんたのことは知ってるぜ」

「……………」

「神罰商会のエース。切り札」

だが、と、男は言う。

「——今は、ただの無力」

ボツ、と、男の握る棒の先端に炎が灯る。

「恐れていたのはあんたじゃない。あんたが持っていた力。即ち、絶対氷結領域」

「……………」

「今のあんたには、それが無い。つまり、恐れるものなどない……」

「……」

叫びに合わせ、男は棒をメインステージに叩きつけた。

石盤が爆発し、爆煙を巻き起こす。

「受けてみる。この六星爆殺の力を」

爆発が連鎖的に、ギルドの周囲で巻き起こす。

徐々に間隔を狭め、ギルドを六星爆殺の檻に閉じ込めていく。

「——集点!!」

失ったものは、大きく。

得たものも、また大きい。

ずば抜けた計算能力。そして、人並み外れた身体能力。外れた力に合わせ続けた結果、適合。

それが、力を失ったギルドを更なる高みへと導く。

爆発の檻が重なるその一瞬、ギルドが男に向かって飛びかかってきた。

「……六星爆——」

片手で男から棒を奪い取り、もう片方の手で、男の口を塞いだ。
ゴギユ、と、握力だけで男の顎を外してやった。

「がっ……！」

顎が外れて、口は開いたまま。呼吸が難しい。口内が渴く。

「ご機嫌だな。よほど面白い夢でも見てたんだろうな」

「がっ……がっ……」

「つーわけで、夢の続きと洒落込もうじゃねえか」

ギルドが突き出した棒は、男の渴き切った口の中に入り——爆発した。

短い爆発音が響く。口から爆煙を吐きながら、男はメインスタージに倒れていった。

ラウンド53 裏の役者達

神罰商会の第五回戦が始まった時、ステージ上には、ギルドの姿はなかった。

ギルドはアークス聖十字学園の中にいた。

第四回戦の勝者であるギルドだったが、その勝ち方が大会の意向を無視しているとされ、審議された結果、本大会の出場停止が命じられてしまった。

対戦相手だった男は医務室に運び込まれ、集中治療を受けている状態だ。

広場では、空間モニターを通じて、神罰商会の皆が試合を観戦している。

その傍ら、ギルドは壁で一人離れた場所で、試合を静視していた。試合の映像の中に、盛り上がる仲間の姿が。

暢気な奴らだと、ギルドは思った。

「やりすぎはよくない」

勇人が隣に来た。缶コーヒーを一本差し出して。

「噛ませ犬はな、殺される為にいるんだよ。牙向いて命乞うなんざ論外だ」

ギルドはコーヒーを分捕った。ラベルを確認し、微糖。無糖でないことに苛立つ。

「甘ったれの糞野郎は向こうで馴れ合ってる」

コーヒーを勇人の胸元に叩きつける。勇人は片手で造作もなくキヤッチ。ラベルを確認。特に異変はないと認識した。

「……嫌いなのか？ コーヒー」

ギルドは無視した。

嫌いなんだろうということと落ち着かせた勇人は、勿体無いので自分でコーヒーを飲むことにした。

「でも、よかったな。退場処分にはならなくて」

「……………」

ギルドには腑に落ちない部分があった。

実のところ、先程からそれが気になっていたのだ。

勇人の言う通り、本来なら、今回のギルドの行動は、即退場処分が言い渡されてもおかしくない。

過去の事例から見ても、やはり即退場処分にされている。それもギルドより軽い状態で、だ。

「中継はされてるみたいだが、やっぱり近くで試合が見れたほうが楽しいもんな」

どうしても会場に残したい理由があった？

ギルドは、そう考えていた。

（……裏十字会か？）

表舞台に立つことのない裏十字会が、まして出るはずのないこの大会に出場した。

「ギルド？」

ギルドはその場を離れた。

この大会は、ただのトーナメント大会ではないようだ。

何か、裏がある。

ラウンド54〜中盤戦のレベル

神罰商会第六回戦。

メインステージには、ミナコがいた。

対する相手は、精霊保護協会のエレメンタル・ウィンディーネだ。水の体である。地面に溶け込むように立っている。

神の生まれ変わりとも言われているエレメンタル。踊り子のようなその姿は、どこか神々しく見えた。

試合は既に始まっている。

ミナコは何度か十六夜で斬りかかってみたのだが、相手は水。骨肉のないその体には、刃は通っても傷は与えられない。

「刀は当たらなくても――」

相手は水。ならば、熱して沸騰させれば、蒸発する。

ミナコにはそれが可能だ。可能にできる力を持っている。

十の顔を持つ刀、十六夜だ。

十六夜の黒い刀身が、灼熱の赤と大自然の緑の半々で染まる。

「ミナコエクスプローションなら！」

第一開放の風。第二開放の火。

二つの力を合体させた――連携開放。

振り上げた刀を、地に叩きつける……！！

「ハイパーミナコエクスプローション！」

地を連打する小爆発の連鎖が、ウィンディーネを襲う。

直撃。ミナコは確かな感触を得る。

白煙が立ち込める。しかし、そこにはウィンディーネのシルエツトが見えた。

「効いてない！？」

白煙から、強力な水鉄砲が放たれる。

死角となっていた白煙からの一撃。不意の一撃となった水鉄砲にミナコは惑わされる。

反応が遅れる。反射的に十六夜で受けたが、切れた半分の水弾がミナコの肩口に触れた。

スパツ、と、セーラー服の袖口が鮮やかに切れる。

傷はセーラー服を越えて、肌にまで及ぶ。

腕から僅かな血が流れる。

「……っ！」

運悪く、ミナコは利き腕をやってしまった。

「神罰商会も落ちたものです。かつての小勢力時代には、遠く及ばない」

ウィンディーネは更に攻める。

右手を前に。すると、ミナコの足周りに水の渦が走る。

やがて規模を拡大し――

「んぐぐ……」

人一人包み込むほどの巨大な水の渦が生まれた。

「諦めなさい。神罰商会」

ミナコが水の牢獄に捕らわれる。

ラウンド55 負ける恐怖と勝つ恐怖

水の牢獄の中には、息苦しそうにもがくミナコがいた。

下から覗くウィンディーネは、水の牢獄の強化に力を注ぐ。

人一人包み込む程度だった水の牢獄は、規模を拡大し、高層ビルを包み込むぐらいにまで強化されている。

水の牢獄の中は、螺旋状の渦が流れており、ミナコの体は渦に遊ばれていた。

脱力して手離してしまった十六夜が牢獄を一人歩きしている。

レフリーの判定旗は下りない。

「……どのみち、持って一分というところの命」

相手が戦意不能と判断されれば、その時点でウィンディーネの勝ち。

つまりは、精霊保護協会が勝ち――

「神罰商会は、ここで負ける」

ウィンディーネは絶対的な勝利を確信していた。

この状況、どう足掻いたところで覆しようがない。

そんな余裕が、一分も過ぎた頃には無くなりつつあった。

ミナコは未だに水の牢獄の中。一般的に考えても、そろそろ息切れするころ。

なのに、レフリーは判定旗を下ろさない。何故だ。

このまま対戦相手を死なすようなことがあれば、逆にこちらがルール違反により負けてしまう。

「レフリー……ッ!!」

焦燥と不安。

混沌とした感情がウィンディーネを襲う。

だが、さすがな中盤戦まで生き残った者。

力が崩壊することなく、安定して水の牢獄を操作している。

「……………」

その時、ウィンディーネは我が目を疑った。

「いない……」

水の牢獄の中に、ミナコの姿がないのだ。

閃光の如く脳裏に過ぎる、一向に判定旗を下さないレフリーの姿。もしも。

もしも判定旗を下さなかった理由が――

「……第三開放、氷鏡水月」

対戦相手に勝機が残されていたからだだったなら。

「な、何であなたが――」

セーラー服姿のミナコが、二人。

鏡合わせとなって、立っていた。

「最初からミナコはここにいましたよ」

「そんなこと……！　だって、あなたは水の牢獄に――」

「氷鏡水月。これは、持ち主の分身を生み出す力」

二本の十六夜が、灼熱の赤と自然の緑の色を帯びる、

「ウィンディーネさんが見てたのは、もう一人のミナコなんじゃないんですかー？」

灼熱の光がウィンディーネの顔を照らす。

単純計算で、温度は先程の倍。

あれをこの距離で受けたら、確実に耐え切れない。

「……ま、参りました」

萎縮した声で、ウィンディーネは降参する。

レフリーのジャッジは、そこで下さされた。

ラウンド56 神の眼にも届かない

DOD一日目が終了した。

会場内の宿泊施設に泊まるのが基本とされている。

ただ、特例もあり、神罰商会はその対象だ。

一ヶ月ぶりのミナコの部屋は、少し女の子らしくなっていた。主にピンクなどの明るい色が増えている。

「模様替えしたのか」

入口から部屋を見渡しながら、勇人は言う。

「勇人さんがいない間、いっぱい契約を取ったので、改装してもらったのです」

とりあえず靴を脱いで、中央に腰を下ろした。

星空を見るように、天井を眺める。一段階薄い色でハートが浮かんでいるのが見えた。

「その時に十六夜も使いこなせるようになったのか」

「そうです。おかげで今のミナコは“十二開放”まで出来るようになったんですよ」

「十二開放？」

その言葉に詰まる。

「十六夜は最大で十までしか開放できないんじゃないのか？」

「最初はミナコもそう思ってたんですが、どうやら、十六夜は最大で“十六開放”まであるみたいです。取引先のアイテムコレクターの人曰く、十六夜の名の由来もそこから来ているみたいなんです」

「なるほど。……それにしても十六開放か。魔力に比例して姿を変えるのが十六夜の特性だから、十六ともなると大変そうだな」

そうです。と、ミナコはしてやっтарいの顔を浮かべながら言った。十六夜は持ち主の魔力に比例して姿を変えます。でも、勇人さんは覚えてないでしょうけど、実はミナコが勇人さんと出会ったあの日の夜、勇人さんはアルトウクス神様になって、しかも、ミナコの

十六夜を使つたのです」

「そうなのか」

「ええ。ですが、その時の十六夜は第十開放しかしていないのです。あのアルトウクス神様でさえ開放できなかったのには、ワケがあるのです」

ミナコは十六夜を抜き、黒い刀身を見せてやった。

ほぼ中心に手を置いて、

「さっきの試合中、十六夜が半分半分の色に分かれた時がありましたよね？」

「ああ、連携つて言つてたやつだな」

「そうです。この連携技は、二の倍数につき一つずつ存在して、本来の十の開放と五の連携技。これを合わせると、十五開放になって最後の第十六開放は、この一から十五の全てを開放した時にしか出ない“裏開放”なのです！」

「出すのが大変だな」

「その分、きつと凄い力があるに違いありません！ 勇人さんにも負けない力ですよ！」

「神戯はニヤン師匠直伝の必殺技だからな。そう簡単には負けないさ」

神戯。その言葉を口にした時、勇人はふと聞き忘れていたことを思い出した。

「……そういえば、魔界に空っぽの鎧の生き物なんているのか？」

「えっ、そうですね……。スピリッツはそれに近いかもしれませんが、何かあつたんですか？」

「ああ、実は一回戦目の時だったんだがな。——神戯が“当たった感触”がなかったんだ」

ラウンド57 禁断の密会

魔界を一望できる高級レストランに、アダムがいた。

悪趣味な白スーツが、今宵は決まって見える。

アダムの正面には、一人の女性がいた。透明感のある女性だった。アダムは徳利を持った手を、女性に差し出した。

「まあまあ、そう固くなるなよ。俺とお前の仲だろ。——イヴ」

夜景に似合うドレス姿。色白の肌。女性らしい華奢な体。

背は高く、性格は冷静沈着。

左右非対称の長い黒髪。額が露わになるはずのそこから対角線上に沿って、包帯が巻かれている。

ただの包帯ではなく、何か複雑な呪文のようなものが書かれた包帯だ。

魔界商会総長。イヴである。

「大会開催中の組織同士の接触は禁止されているはずですよ」

「固いこと言うなって。それに関係ないだろ？——神罰商会と魔界商会。魔界の二大トップのトップによる密会。大会開催中だけでなく、見つければ問題になる」

最上階の広いそのフロアには、不自然なほどに人がいなかった。

イヴは知っている。ここのレストランは魔界で最も人気のお店。営業中は常に満席状態。予約は年単位でしか取れない。

それなのに、いない。

「あなたがここまでするなんて——目的は何？」

イヴは徳利に酒を注いであげた。

「お前も薄々気付いているだろうが、裏十字会のことだ」

アダムを酒を差し出すが、イヴはそれを拒否。早々に退席するつもりだ。

「俺達が一回戦目に戦ったやつを覚えてるか？」

「天川勇人と三ツ喪神の対戦でしたね。——知ってますよ」

真面目に話していたアダムだったが、途端、表情が崩れた。

「つんだよ……気付いていたなら、こんなところに呼ぶな」

我慢していたタバコを吸い出す。溜め息混じりの煙が窓に映る夜景を掻き消す。

「呼んだのは、そちらからでしょう」

がつ、とテーブルに肘をつき、前に乗り出した。

「……で、どうするつもりだよ。——この『神話再生』について、どう動くつもりだ」

イヴは席を立った。

「そちらに話すほど、この案件は危機圧迫はしていないでしょう。去り際、イヴは助言する。

「そちらが心配すべきなのは、こちらではないでしょう」
頭に様々な情景が浮かぶ。

神罰商会の一番の問題児だが——それでもやはり仲間だ。

「……“聖人抹殺”か」

ラウンド58 やめられない理由

薄暗い廊下に、ギルドはいた。

ガラス越しには、サテラが治療を受けていた。

様々な器具を付けたままで、その格好は死ぬ間際とさほど変わらない。

「ギルドね」

サテラの声が届く。本人が喋っているわけではない。特殊な器具により、本人の心を言語化しているのだ。

ギルドはガラスに背を向ける。

「俺で悪かったな」

「ひねくれてるわね。——聞いたわよ。出場停止処分にされたんだって？」

「けっ、生温いんだよ。どいつもこいつも」

「私のような人を出さないって約束したじゃない」

「守ってやったじゃねえか。お前ほど酷くねえんだからな」

「——同じよ」

サテラは少し寂しそうな顔をしていた。

「結局、ギルドは何も変わっていない。あなたの根本は、あの時のままよ」

「それでも手加減してやったんだ。感謝しろよ」

変わっていない。

本当に、この人は変わっていない。

変わらないのか、変わりたくないのか。

彼の根底を支えるそれは、きっと今の彼をそうさせる原因なんだ。

「ねえ、教えて」

私は彼の上辺しか知らないから、本当の事実を知りたい。

「——ギルドは昔、どんな子だったの？」

「話してもいいが、子守歌には向かないぜ」

「いいわ。知りたいの。——ギルドのことが」

「……けっ、どんな口説き文句だよ」

吐き捨てるようにギルドは言い、眠るように瞼を閉じた。

そこに映る悪夢のような情景の数々。

思い浮かべるだけで、体中が強烈な殺意に蝕まれ、とてつもなく誰かを殺したくなる。

「教えてやるよ」

だからあの時も、こいつをやった時も殺しかけた。

今、俺がこいつの前で過去を話して、正気でいられるとは限らない。

それを分かった上で聞きたいって言うんなら——

「俺の過去を」

教えてやるよ。

ラウンド59 ギルドとサバト

魔界特種区スラム街。

ギルドの生まれ育った場所である。

荒廃した外観や雰囲気などは、普遍的なスラム街だ。

だが、そこに住むのは、特種認定された種族のみ。

付け加えると、住むのではなく住ませる。つまりは強制ということだ。

理由は簡単で、他の種族との争いを避けるため。

特種認定された種族は、その大半が他の種族より秀でた力を持っているのだ。

中でも聖人と呼ばれる種族は神を越えると言われている。

ギルドがまさにその聖人であるが、強さ故に、ここ特種区では日々、標的にされることが多い。

入り組んだ石造りの町。

その路地裏から広場に抜けて出てくる者達がいた。

先頭はギルド。そして、その後ろに彼を狙う若い二人組の男達。

ギルドは広場の中心——噴水まで走り、後方を振り返る。

「光れ！ 死罰の指輪」

男達は二手に分かれ、右に回った男が右の薬指に嵌める指輪を見せつけた。

指輪の中心で邪悪に光る宝石から、光線が放たれる。

ギルドを噴水の反対側に飛び移った。

光線はギルドを捉えられず、噴水の中に立つ石像に当たった。

光線を浴びた石像が、泥のように溶けていく。

「……っ、腐敗の力か」

「冷静に分析なんかしてんじゃねえよ」

ドンッ………！

「がっ！」

ギルドは後頭部に強い衝撃を受けた。

脳が揺らされ、吐き気を催す。

振り返るとそこには、人ではなく全身銀毛に包まれた獣がいた。

「幻獣“イオンウルフ”か」

限りなく人の成りを保ったそれは、幻獣である。

「最後の生き残りさ。お前の親父に皆殺しにされてな」

「……けっ、だから、息子の俺に腹癒せってか？ 劣等種のやることはいちいち笑えるなあ」

死罰の指輪より光線が、ギルドの脳を捉えられいた。

ギルドは素早く回避する。

「一見強そうに見えるそいつも、捉えてから三秒後にしか効果が発動しないんじゃないやなあ」

——俺にはよ。

ギルドは死罰の指輪を持つ男を見ながら言った。

弱点を見抜かれた男は奥歯を噛み締める。

「……だが、それが分かったところで、この状況をどう脱する」
ギルドはゆつくりと立ち上がった。

「二人の能力者対一人の“無能力者”」

「お前に勝ち目はないさ」

二人が追い込んだその時だ。

幻獣の前に、突如、一人の男が現れた。

後方に巨大な人切り包丁を構えながら。

「最後の幻獣なんだって？」

男は巨大な人切り包丁を横薙ぎに振り切った。

刀身の上を、二つの生首が飛んだ。

「——じゃあ、これで“絶滅”だ」

ドサドサ、と、血飛沫の中に二つの生首が落ちる。

サバト「ペインウォーカー」。

「遅えよ、サバト」

「遅いのはお前だよ、ギルド」

ギルドの兄である。

ラウンド60 シヴァの息子達

ペインウォーカー家は、現在、母親不在の状態で暮らしている。母は、ギルドが生まれて間もなくに死んだ。

その為、現在は父と兄と弟の三人家族で暮らしている。

ただ、暮らしていると言っても、父はほとんどいない。帰ってこないのだ。

魔界では現在、後々の歴史に名を残すような大きな戦争が起きており――それが、神魔聖杯の前身である神魔戦争だ。

厳密に言えば、今は神魔戦争の佳境。最後の生き残りによる大決戦の最中だ。

ギルドとサバトが帰ってくる。

帰ってきたその場所に、家らしきものはない。

あるのは、取り壊された家の亡骸だ。

一階から上はなく、壁はほとんどない。

治安が悪い場所なので、当然のように中身は荒された状態だ。

足の踏み場もろくにない、あってもろくな踏み場ではない、そんな荒廃した環境の中で、二人は暮らしていた。

各々、お気に入りの場所がある。

ギルドは向かって正面の壁、サバトは吹き飛ばされた扉の上だ。

「シヴァの奴は？」

シヴァは父の名だ。

サバトは神経を集中させた。

「っ、……生きてるな」

頭に銃弾が貫かれたような激痛を感じる。魔力を遮断されたからだ。否、されたのではなく、そうだった。

サバトクラス的能力者でも、シヴァを前にしては、息することすらも困難。魔力で魔力を探るなど以ての外だ。

「そうか」

「残念そうだな」

「邪魔だからな」

「まっ、気に入らないなら、まずは能力を身につけるこつた」

おもむろに、ギルドはズボンのポケットを探った。

「こんなもんつけられるかよ！」

叫び、握り締めた銀色の首輪を地面に叩きつける。

「おいおい、そんなざいに扱うなよ。せつかく見つけてきてやったんだから」

「誰も頼んでねえだろ」

「“可愛い弟”がイジメられてんのを、兄が見過ごせるわけないだろ？」

「けっ、言ってる。クソが」

ギルドは壁から飛び降り、背を向けた。

「どこ行くんだ？」

「能力者狩りだよ。俺の能力は俺で見つける」
町に姿を消していく。

「まったく、世話のやける弟だ」

ラウンド61 道理を越えた道理

サバトに聞いた。

あの首輪には、絶対氷結領域という、物理的なもの全てを氷結する能力があるらしい。

俺も馬鹿ではない。それがいかに凄いものかくらい知っている。欲しいと思う。

だが、アレは俺ではなく、サバトが見つけたものだ。サバトの俺の為だと言う。だから、俺は余計にあのデザインが気に入らない。

無能な犬を縛り付ける。そんなイメージがあつたからだ。俺は、飼う犬なんかじゃねえ。

誰の指図も、施しも、何も受けねえで、生き続ける。

*

そんな一匹狼の精神で生き続けるギルドに転機が訪れたのは、神魔戦争終結後のことだ。

未だ絶対氷結領域を拒むギルドとは別に、サバトは絶対から完全へと——つまり、完全消滅領域へ格上させていた。

神魔戦争の勝敗は、決着付かずの引き分け。

これは魔界でもあまりに知られている話だが、この後に起こる話を、魔界の者は知らない。あるいは信用していない。

理由は簡単。有り得ないからだ。絶対、いや、完全と言ってもいい。

シヴァが殺されるなんて。

ましてそれが——

長男のサバトに殺されるなんて。

誰一人、信じられなかったのだ。

唯一、現場を目撃した一人を除いては。

*

ようやくまとまな住まいを入れたペインウォーカー家は、それほど大きくもなければ小さくもない、苦なく暮らす分には十分な広さだった。

そんな家の中でも、まだ使用されていない部屋が幾つか残っていた。

その一つで、シヴァは殺されていた。

外は凄まじい雷雨。まるでこの血肉の結末を予言するかのような天候だった。

鳴り止まぬ激しい雨とその音。そこに時折突き刺さる雷鳴とその光。

一瞬のその光が真っ暗なその部屋を照らしつけ、嫌でも死を植え付ける。

「な、何してんだよ……、サバト……!!」

ピシャ、と、その日一番の雷鳴が轟く。

「ああ、ギルドか。何って、見れば分かるだろ？」

たった一人の目撃者。それは、弟のギルドだった。

「——親父を殺したんだよ」

ラウンド62 偽りの器

「親父を殺したって…… ということだよ！」

ギルドが訴えかけたその時、サバトが姿を消した。

「どうもこうもないさ」

ガツ、と、後頭部に強い握力を感じたのは、消えてすぐのこと。
力に押されたギルドは、床に叩きつけられた。

「っ……！ 能力か」

馬乗りになつて制圧するサバトのその手は、人を殺したとは思えぬほどに綺麗だった。

「――殺したいから殺した。それだけだ」

潰されたような声でギルドは、

「家族殺しは大罪。まして、特種の俺達にとって、それは――」

「家族ではないからな」

「…… ああ、そうだよ。確かに親父は家族らしいことなんてしてねえよ。けどな……！！」

「“そういう意味” じゃないんだよ」

「じゃあ……」

サバトはゆつくりと立ち上がった。

ギルドはサバトをどかし、すぐさま食いかかった。

「どういう意味なんだよ！」

馬鹿みたいに迫り来るギルドが、サバトには滑稽に見えた。

「頭もねえ、力もねえ」

振り返り、サバトは突き付ける。

「……っ」

がら空きのその首もとに、大剣の切っ先を。

（いつのまに……！？）

何もできないギルドをみて、ますます滑稽に思えた。

「弱いんだよ。お前」

サバトは追い詰めるように、

「何も出来ねえクスが、最強気取ってんじゃねえよ!!」

「俺は……!!」

「喋るな。十秒くれてやる。——それまでに姿を消さなければ、お前も親父と同じ目に遭わせる」

——俺の前からキエ口。

*

ギルドはサテラに語りかける。

「あの時、俺はようやくサバトが親父を殺したと分かった」
後にギルドはシヴァの遺体を確認したが、変わった損傷は見当たらなかった。

つまり、ただ心臓をぶっ刺されただけ。子供でもできる。

シヴァはその言葉通り、最強だ。

「何で親父を殺せたのかだって？」

最強だけど——家族だ。

たった一人、息子二人を育てた父親だ。

「俺達の親父だからだよ」

だから、家族の前では、最強でもない——普通の父親だったのだ。

ラウンド63 聖人たち

「――探しましたよ。ギルドさん」

薄暗い廊下の入り口に、ドクターがいた。

白衣姿の低音ボイス。

陰湿な雰囲気漂うその男は、神罰商会とは契約済みという間柄だ。ギルドは近くに歩み寄りながら、

「お前が来たってことは――いよいよ直ったってわけか」

「ええ、さすがに時間はかかりましたが……」

立ち止まり、ドクターからそれを受け取る。

「絶対氷結領域は、完全に元通りになりました」
ギルドは受け取った首輪をはめた。

「……そうみたいだな。金はいくらだ？」

「お代なら先にアダムさんから頂いてますので」

「？ あいつが？」

「ええ。仲間思いで実に良いリーダーですね」

「……………」

どうも腑に落ちない。ギルドは考えていた。

アダムはギルドを嫌っている。それは本人から直接言われたので確かなこと。

嫌いなら、わざわざ代金を立て替えるか？

「――ギルドさん？」

いや、考え過ぎか。

「何でもねえ。世話かけたな。“ちっこいの”にもよろしく言うてくれよ」

*

そして、時は二日経ち――

DOD二日目。

その第一試合。

「——これは、特例処置である」

神罰商会对裏十字会。

その戦いの舞台上には、出場停止とされていたギルドが立たされていた。

会場は、別の意味でざわついている。

ギルドは、まるで断頭台に立たされたような気分だった。すこぶる、気分がいい。

「裏十字会の寛大な処置により、今試合に限り、ギルド＝ペインウォーカーの出場を許可する」

神罰商会で観戦する者達の声は、二分している。

素直に喜ぶものと疑問に思ふもの。

その疑問も様々だが——アダムは“来たか”と疑問を振り払っていた。

不安するアダムとは別に、ギルドは待ってましたとばかりに“来たか”と呟いた。

「これより、ギルド＝ペインウォーカー対サバト＝ペインウォーカーの試合を開始する」

正面に立つ——兄の姿を見て。

ラウンド64〜絶対氷結領域vs完全消滅領域〜

戦いの合図が下りてから、しばらくの間、会場は神聖な空気に包まれたように静まり返っていた。

「……ああ、面倒だなあ」

その言葉通りのだらけた態度でサバトはいた。

何一つ興味のないその男の目に、ギルドの首もとのそれが入る。

「ああ、力、戻ったのか。似合ってるじゃん」

「言ってる。クソが」

「……まっ、どうでもいいんだけどな」

サバトは話題を切り替えた。

「それよりお前も成長したな」。前のお前だったら、腹空かせた野良犬みたいに食ってかかってきてたからな。——褒めてやるよ」

サバトの言う通り、ギルドは完全消滅領域を警戒している。

故の沈黙。天井知らずのその力に恐怖していると断言している。

「——というわけで、一発目はサービスだ」

サバトは床を蹴り上げ、高く跳躍した。

地上十メートルくらいで落ち着いたそこから、右の握り拳を振り下ろした。

ギルドは放たれたほぼ同時に横に飛び込んだ。

瞬間。

ズバアアアアア!!!

「……!!!」

凄まじい斬撃が、石で造られた舞台を真っ二つに切り裂いた。

威力は底を知れず、先に座る競技委員、更に全会場を映す巨大モニターをも破壊した。

モニターは爆発し、ガラスの破片を周囲に降らせた。

競技委員の者達がなかなかの手練れでなければ、今ごろ、大惨事になっていただろう。

サバトはゆっくりと着地し、右手の調子を確認しながら、

「うーん、もう少し加減した方がいいか」

などと、とぼけていた。

「——“見せてやっただろ？”」

サバトは声音を変えて、突きつけた。

「消滅剣。スレイバースード 本当ならモーションも消せれるんだけどな。成長した弟の為に手加減してやったよ」

「手加減なんざすんじゃねえ。全力で殺れよ」

「いやあ、全力で殺ったら——」

正面、絶対氷結領域による絶対零度の突風が消えた。

「お前、すぐ死ぬじゃん」

完全消滅領域の前では、如何なる強力な力も消滅させられる。絶対氷結領域など、クズだ。

ラウンド65 範囲外攻撃

「……っ！」

わかつてはいた。

ギルドは痛感している。

サバトとの力の差を。

差なんて生易しい言葉では表現しきれない。

残酷なまでの“血縁”を。

「——絶対と完全」

サバトは言う。

「絶対の力は、物理的な干渉までしか許されない。しかし、完全の力は、あらゆる全てへの干渉が許される」

その手を、ギルドにかざした。

「——“正解”だ。あらゆる全てへの干渉が許される完全の力にも、領域という制限がある」

ギルドとサバトとの間合いは、およそ二十メートル。

完全消滅領域は、自分を中心とした半径十五メートル圏内が、能力の範囲内だ。

対照的に、絶対氷結領域の効果範囲は半径二十メートル。完全消滅領域より範囲はある。

つまり、範囲で言えば、絶対氷結領域の方が有利かもしれない。

ただ、仮に完全消滅領域の範囲外から攻撃しても、対象を狙う以上、結局は効果の範囲内に入ってしまうので、有利と断言まではできない。

むしろ、完全消滅領域の方が効果が上である為、絶対氷結領域の不利と言えよう。

いずれにせよ、ギルドが範囲外にいれば、攻撃は受けない。この図式は確実だ。

「領域は消滅できない。言われなくても知ってただよ、こっちは」

「ああ、そうだったか。——んじゃあ」

おもむろに、サバトは右手で天井を指差した。

観客全員が視線を天井に誘導される中、ギルドは周囲を警戒していた。

「残念。そっちじゃない」

ギルドの右頬を掠る刃。

後方から。

立て続けに。

——来る……！！

「範囲外からだ……！？」

ギルドは数発、攻撃を受けてしまった。

「氷結領域を張って、消滅反応を探ったか」

「……………」

今、確かに範囲外から攻撃してきた。

どういうことだ？

「ちよっとした手品だよ。——意識の消滅というね」

「意識……？」

「——俺は、ただ、範囲内で攻撃しただけだよ」

「……………」

間合い。

ギルドは気付く。

サバトとの間合いが縮まっている。

——意識の消滅。

「……俺の中から、お前の意識を消したのか」

「さあ、手の内は全て明かしてやったぜ。後は——お前がどうできるか、だ」

ラウンド66 完全を越えた力

消滅剣を振り下ろす。

何度も。何度も。

見えない剣を対処する術はなく、ギルドはステップを踏んで躲すことに徹した。

だが、その行動はサバトの思惑通りに他ならない。

躲すことで、場外まで追い込んでいるのだ。

当然、ギルドも承知の上での行動である。

景色も見えなくなるくらいの濃い冷気を振り撒き、一瞬の時間を作る。

そこから場を持ち直し、再び躲すことに徹する。

そうした繰り返しを続けていた後、ギルドが仕掛けた。

濃い冷気を切り裂くサバト。いないとわかって切り裂いたそこには、ギルドがいた。

消滅剣を掴み、凍らせる。

全体ではなく、一点を何重にも凍らせた。

重点的に凍らされた消滅剣は加重した重量に堪えきれず、半分に折れてしまった。

僅かながら、全体にも氷結能力の影響が加わっていた為、折れやすくなっていたのだ。

「やるねえ。けど、接近戦に持ち込んでいいのか？」

幾度も切り裂いた冷気が、水滴となって付着していたことも、要因の一つだろう。

「効果の対象は一つまで。剣を消している以上、お前は、俺の命を消滅できない」

「似合わないなあ。その冷静な分析」

サバトは右手を伸ばした。

伸ばしたその手で、ギルドの左腕を掴む。

まさか——！？

ギルドの左腕が消滅する。

脳裏に映り込むその映像に恐れを抱き、ギルドはとっさに身を引いた。

「……………」

左腕はある。

「そうそう。それぞれ」

サバトは追撃する。

魔の手とも言つべきその右手で、ギルドの急所を狙いにかかる。

「冷静な分析なんかいらねえ。本能でかかってこいよ」

ギルドは再び防戦一方となった。正確には守るのではなく、避けるだが。

「……ッ！」

何故だ。自分に問い掛ける。

何故、ありもしねえことに恐怖する。

二つ以上を効果の対象にはできない。完全にないんだぞ。
なのに……何故。

何故、こいつに恐怖する。

「——“虚無の世界”」

「！？」

「何故、親父がその名で呼ばれていたか。それは、親父が虚無の力を持っていたからだ。だが、それなら虚無とだけ呼べばいい。それなのに虚無の世界と呼ばれていたのには、理由があった」

「……まさか……」

不敵な笑みが浮かぶ。

瞬間——。

二人のいる中心以外の全ての土台が消滅した。

林檎の芯のようなアンバランスな舞台が、滑稽にもそこには残っ

ていた。

否。残されていた。

「――ようこそ、完全消滅世界へ」

ラウンド67 潜在的覚醒

「これが……完全消滅世界……」

消滅した会場の成れの果てを見て、ギルドは啞然とする。

もはや恐怖という感情はなく、厳密には抱く余地すらなく、ただただ事態を呑み込めずにいた。

「世界の力の領域の欠点を全て無くした——領域シリーズ、最終形態」

欠点を全て——事態は呑み込めないが、複数を効果対象にでき、効果範囲を拡大、あるいは無制限にできる。

「……そういうことか」

「おいおい、何度も言わせるな。冷静に分析なんかするなよ。——死ぬぜ？」

「！」

この距離……まずい！

「……ッ！」

ギルドは出来るだけ高く、そして出来るだけ遠くに距離に置いた。「無駄だ。世界の力に効果範囲はない。世界そのものが対象だ」逃げ場がない。

見えない。その一点が心理を掻き乱す。

サバトは動いている。だからといって、それが攻撃をしていることには繋がらない。

攻撃をしていると見せかけているかもしれないからだ。

されているかも分からない攻撃を、必死になって避けるこちらの、その体力を奪う。

厄介だ。

だが、厄介だからといって、無闇に近づけば、それこそサバトの思う壺。

（——結局、全ての距離であいつに敵う見込みはねえんだ。考えて

も無駄。余計な体力を消耗するな)

ギルドは思う。

こうして逃げて、しかし、サバトがトドメを刺さないのには、何か理由があると。

その理由こそが、完全消滅世界、唯一の欠点。

「——わかつているはずだぜ、ギルド」

「!？」

「今のお前では、どう足掻いても俺は殺せない」

「……ッ」

わかつている。

欠点がわかつたところで、結局、決定打は打てない。

この圧倒的な実力差を埋めないことには。

「俺と“対等”にならなきゃな」

圧倒的な実力差。

それを埋める方法は、一つ。

「見せてみるよ。完全氷結領域……、いや——完全氷結世界をよ」

ラウンド68 独りの心

「どうした。別に減るもんじゃないんだ。勿体ぶるなよ」

「……っ」

ギルドは奥歯を噛み締めた。

己の無力感。痛感する。

「……やっぱ、駄目だな」

震えるほどの冷めた声。

その直後――

ズズズ……

ギルドは右手に違和感を感じた。

痛みも何もない。

ただ――

「……クソが！」

振り払う。

失った右手で振り払う。

何でもいい。絶対氷結領域の力で冷気を撒く。

「無駄だって言っただろ？ 効果対象は複数指定できるって」

冷気が消滅させられる。

右手の消滅効果は全体に、徐々に核へと侵食していく。

「――ほら！ 出せよ！ 引き出せよ！ 本能を呼び起こせよ！」

手が、足が、胴が、頭が。

「サバトオオオオオ！！」

ギルドが消滅させられた。

静まる会場。舞台上には、ただ一人、サバトだけが立っていた。

神罰商会。

アークス聖十字学園中央部。

モニターから試合を観戦する皆が、絶句していた。
ミナコも、勇人も。

「……おいおい、こりゃ、どうなってやがんだ」
そして、誰よりアダムが驚いていた。
舞台上。

確かにそこには、サバト一人しか立つてはいなかった。
だが、上空――

薄い黒霧に身を包むギルドが一人、飛んでいた。
背中に氷結した羽根を生やし、飛んでいたのだ。

「絶対を超えた完全。完全を超えた世界。それならまだ分かる。だが――“虚無の能力”まで覚醒させるなんて、完全にありえねえぞ」
ギルドを包む黒い霧状のそれは、虚無の能力。

今現在のギルドの体を構築するものは虚無の能力であり――ギルド＝ペインウォーカーという存在そのものが虚無の能力なのだ。

「ありえなくはないんですよ。アダムさん」
影から姿を現したのは、サテラの治療に来ていたドクターだった。
「どういう意味だ」

「どうもこうもありません。ギルドさんの能力は、最初から絶対氷結領域ではなかったのですから」

「そんなわけがねえ。あいつの能力は絶対氷結領域。それはお前だって知っているだろう」

「ええ、最初は私も信じられなかったですよ。――ただ、ギルドさんのアイテムの修理をしていた時、違うのだと知りました」

ドクターは告げた。

「ギルドさんが持っているアイテムの能力は『心の具現化』。持ち主の心を鏡のように映し出し、力とし具現化するアイテムだったのです」

スピリチュアル・アース
「……『全神全霊』だな。能力自体が反則とされ、永久に封印された至高のアイテム」

「彼の境遇を深くは知りませんが、恐らく、長く心を閉ざしていた

のでしょう。——絶対氷結領域は、そんな彼の心を表していた力だ
ったんです」

ラウンド69 お前に俺は殺せない

凄い。とは思わなかった。

当たり前のように静観して、だけどそんな顔とは裏腹に、心は歓喜と安堵と——幾許かの解放感で満たされていた。

そして、こう思うのだ。

ようやく死ねる、と。

夢半ば、瞼の裏に成長した弟の姿を焼き付けながら。

サバトは、歪な舞台上で倒れた。

*

こんな話を、ギルドは知らない。

ある日、サバトの耳に『聖人抹殺』の話が流れ込んできた。

それも、その計画を企てたのが、シヴァ。つまり、自分の父である。

いや……、義理の父か。

これは、ギルドにも伝えていないことだ。

シヴァという男は、それよりも前に聖人抹殺をした過去がある。

理由は、魔界の制圧。

聖人という存在が魔界の頂点である証を誇示する為、弱き聖人は抹殺したのだ。

その際、辛うじて生き残ったのが、サバトとギルドだ。

サバトは幼いとは言え、もう見た物を記憶するくらいの知性は備わっていたので、この事実を覚えていた。

だが、ギルドはまだ生まれただけの子供。はっきり言って、聖

人というだけでこの場に呼ばれたに過ぎない。なので、完全にシヴァを父と思っている。

サバトが真実を告げなかったのは、ギルドの為を思ってた。

ギルドはシヴァを遠からず尊敬していた為、表には出さないが、彼の子供であることに誇りを持つていただろう。

だから、あえて真実は伝えなかった。

そんな日々が続いた中で流れ込んできたのが、二度目の聖人抹殺だ。

理由は単純。見込み違いだったから。

情報を知ったサバトは、真っ先にギルドの身を心配した。

ギルドは能力を持っていなかったからだ。

能力を持っている自分でさえ、シヴァを前にすれば殺される。せめて能力を持たせなければ。

そこでサバトは、伝説のアイテム『全神全霊』を持っているという噂を聞きつけ、それを所有する組織、裏十字会に入った。

裏十字会との交渉の末、条件付きで全神全神を頂戴した。

その条件とは――

裏十字会の創始者“エデン”は、仲間達に告げる。

「義理の弟の命の代わりに、俺を殺してくれて構わない……だ、そうだ」

ラウンド７〇〇本物の義兄弟

何も考えようとしなかった。できなかったと言っている。
ギルドは、混乱していた。
つまり、これはなんだ。

あいつが突然倒れて、で、そのまま起き上がらない。

死んだ……のか？

だからこそ冷静に、状況を呑み込んできたギルドの体は、心は。
状態を表すように、その姿を素にさせた。

ゆつくりと地面に着き、サバトに歩み寄ってみる。

冷静な思考が、微かに毒の臭いを感じさせた。

「……あ？」

怒りが、こみ上げてくる。理不尽な怒りだ。

手前の事情も知らねえで、何勝手にヒーロー気取ってんだよ。

「寝ぼけてんのか、テメエ！！」

ギルドはサバトの腹を蹴り飛ばした。軽かった。人じゃないみたいに軽かった。

こんなクソみたいな蹴り、楽々避けれるのに避けなかった。避ける素振りすらしなかった。

「……」

「……いや、できなかったのか。」

「俺はア！」

腹が立つ。馬鹿みたいに腹が立つ。

「親父を殺したテメエを殺す為に！」

勝手に義理立てして、ないものまで背負い込んで横たわってるバカや。

そんなことを一つも相談しねえクソや。

何より――

「今日まで生きてきたんだよ!!」

そんなことも気付けなかった俺自身に。

「……ねえか」

小さな声で、サバトは告げた。

「! ……なんだよ、生きてんじゃねえか。さっさと起きろよ」

「いいじゃねえか。――それで生きてこれたんだったら」

*

荒んだ性格の弟がいた。

とは言っても、血も繋がってない義理の弟だ。

そいつはどうしようもなく馬鹿で、不器用で。

そんな弟の道を正すのが、兄の役目だと思った。

*

「後は、お前の好きなように生きろ。ギルド」

声は掠れ、やがて、永遠の眠りと同時に途絶えた。

それが、サバトの死。

「……ッ、兄貴……」

兄の死だった。

「……………」

ギルドはサバトを背に抱えた。

ゆっくりとした足並みで、会場を去っていく。

デリート・オブ・デステイニー

「――DOD」

声は、会場の奥から。

主催者席。そこで、端正なルックスの男が立っていた。

エデンだ。

黒服姿のエデンの手には、アンティーク製のライフル銃が握られていた。

ギルドに照準を合わせて。

「運命は終わる。さらばだ——“聖人の残り火”よ」

その時、会場にいる誰もが、その光景を見ることはできなかった。何故なら——

タツ……、タツ……、タツ……

たった一人。

ギルドだけが会場を、ひいては世界を歩いていたのだから。

“時間の氷結”。

ギルドは完全氷結世界の力により、時間そのものを氷結させたのだ。

「ッおぶー！」

歩んだ先、主催者席の机に足を乗せ、ギルドはエデンの口を塞いでいた。

肺に流れ込んでいく絶対零度の冷氣。

握力のみで顎と頬を粉砕。一切の呼吸を許さぬよう、空いた左手で上半分の顔を氷結。

「機嫌がいいな。安心しろよ。言われなくても殺してやる。よかったなア、おい。大好きな聖人様に殺されてよオ」

悶え苦しむエデンにギルドは高笑う。

「ヒヤハハハハ！いいねえ！！もつと苦しめ！もつともつともつともつと絶望しろ！極限の絶望をくれてやるからよオー！！」

ラウンド71へ変わってほしいと

嬉しい。

今のギルドのおよそ全てを満たす感情は、それだった。
人を玩具のように翫^{なぶ}り、拳げ句の果てに殺す。

結局、その非人道的かつ非道德的な行為が、たまらなく好きなのだ。ギルドという男は。

だから、今のこの時間が嬉しい。

夢中になるあまり、能力の使い方が雑になっていた。

エデンとギルド以外の人間の時間が動いていた。

会場は悲鳴が止まらない。当然だ。近くにいるそいつは、相手を半殺しにして出場停止になった男なのだから。

そんな奴がすぐそばに？ 有り得ない。今すぐ帰りたい。その痛烈な思いがこの会場を埋め尽くす悲鳴と変わっている。

会場は無数の足音と悲鳴でパニック状態になっていた。

S Pが主催者側の移動を行い、警備員が泥のように混乱する観客を誘導している。

当然、自分だけがという独裁者的な思想の者が規律を乱し、それが一人二人と増えていけば、自ずと制御はできなくなる。

「青く静まる眠り姫」スリーピング・フォレスト！！！」

「赤く猛る鬼の子」レイジング・キング！！！」

会場の混乱が静まる。

お姉さん系マテリアルを主とした魔法使いチームが、アイテムで観客を止めたのだ。

「す、すまない」

警備員が礼を言う。

別に礼を言われにきたんじゃない。お姉さん系マテリアルは言う。「うちのバカを止めにきた。——その道を開くのが、私達の仕事だろ——勇人」

勇人が会場に駆け込む。天冥境地の力により、その速度は人のそれを楽々越えている。

会場へ着いた勇人は叫びながら、

「やめろ！ ギルド！」

しかし途中、観客の波に飲まれてしまった。

「っ、どいてくれ！」

その観客を踏み倒しながら、少しずつ勇人は前に進んでいった。

「……っ、ギルド！ お前の兄さんを亡くした気持ちは分かる！

でも、忘れてたのか！ —— お前はまたサテラにしたことと同じ事をしてるんだぞ！」

進んでも戻される。

進んでも戻される。

まるでアイツの生涯を表したようだ。

「わかつてるのか！ ギルド！ そんなことして喜ぶ人間なんて——

誰もいないんだ！」

「うるせえ！！ テメエに俺の何が分かる！！ 兄貴を亡くした気持ちは分かる！？ ナメんなア！！ 神下がりがア！！」

—— やめて。

たった一人、その者の出せるはずない声が、会場を鎮めた。

会場も、ギルドも。

ミナコに車椅子に運ばれ、姿を現したのは——サテラだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3827t/>

神魔聖杯アルトックス～高校生が神になりました～

2011年11月28日01時13分発行